

応用心理学の クロスロード

特集 日本応用心理学会第85回大会報告

CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学

11

2019 March

JAAP 日本応用心理学会

—— 応用心理学46年 ——

谷口 泰富 (駒澤大学)

本学会名誉会員の故秋重義治先生の推薦により、1972年(昭和47年)に日本応用心理学会に入会し、以来46年の月日が過ぎようとしています。私が入会した当時の日本応用心理学会は、現在と比べると会員数が少ない上に、年齢構成は圧倒的に年配の先生方が多かった印象をもっています。しかし、当時の著名な心理学者の殆どは日本応用心理学会の会員であったと記憶しています。そのため、たいへん不躰ではありますが、私が大会に参加する目的の一つには、これらの著名な先生方のお名前とお顔を一致させるという狙いもありました。現在の大会での研究発表はポスター形式が主流ですが、当時はポスターではなく、全てが口頭発表形式でした。研究発表が終わると、大御所の先生方から厳しい質問攻めにあいたいへん難儀しましたが、それも今では懐かしい思い出となっています。たいへん失礼であります。当時の若い研究者の中に、日本応用心理学会のことを「じいちゃん学会」といっていた人がいました思わず苦笑したことがあります。

しかし、日本応用心理学会はその後大きな変革と発展を遂げてきました。そしてその原動力となったのは紛れもなく若い力でした。歴代理事長の号令のもと理事会を中心に、学会活性化の方策が検討・実施され、私もその一員としてこの企画に参加してきました。始めは手探りの状態でしたが、結果の点検や見直しなどから徐々に成果が確認されました。その後はさらに新たな計画を展開するという、現在のPDCAサイクルの実践で

あったと思っています。私は心理学の究極の目的は、人類の幸福と福祉そして平和への貢献であると考えています。これらの実現のために若い力は不可欠のものであると確信しています。日本応用心理学会は、これまで学会を率いて下さいました先達の諸先生方からのアドバイスをもとに若い力の発掘に力を注いできました。そこで学会が指針としたのは、若手の研究者に対する財政的援助と研究成果の報告方法の多様性への対応でした。財政的理由から年度会費の値上げが行われましたが、この最大の理由は、大学院生を中心とする若手研究者の会費補助、海外での研究報告のための財政的補助そして優秀な研究に対する研究支援でした。また、研究成果の報告に関するものとしては、若手に受け入れやすいポスター形式を採用するとともに、優秀大会発表賞を制定し、機関誌に「短報」や「実践報告」を追加し、国際学会での発表を「特集号」として発刊したことです。これにより、大学院生を中心に機関誌への投稿は急激に増加し、査読などの作業で編集委員会がうれしい悲鳴をあげているのも事実です。

現在日本応用心理学会は約1300人の会員数を有する学会までに発展を遂げてきましたが、さらなる発展は、先達の諸先生方と若手の研究者の十字路(クロスロード)での出会いにかかっているといっても過言ではないと思います。

古希を過ぎた今、やがて訪れるであろう日本応用心理学会第100回大会に思いを馳せています。合掌九拝



谷口 泰富(たにぐち・やすとみ) / (博士 心理学) (1948年(昭和23年)7月5日生)。昭和46年3月 宮崎大学教育学部卒業。昭和52年3月 駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程満期退学。昭和54年4月 駒澤大学文学部助手。昭和56年4月 駒澤大学文学部講師。昭和60年4月 駒澤大学文学部助教授。平成3年4月 駒澤大学文学部教授。【著書】1. Psychology of Zen 1978 Komazawa University. 2. 入門人格心理学 1989 八千代出版。3. 現代のエスプリ 1993 至文堂。4. ウソ発見【共著】2000 北大路書房。5. 科学的虚偽検出の最前線 2004 多賀出版。6. クローズアップ【犯罪】2013 福村出版。他11点。【論文】1. 1992 An Overview: Psychophysiological Approach to Meditation in Japan. Japanese Health Psychology. 2. 1993 瞑想の生理心理学的検討 心理学評論。3. 2014 虚偽検出検査における眼球運動の非接触的測定 心理学研究。4. 2017 Attentional capture by emotional stimuli: Manipulation of emotional valence by the sample pre-rating method Japanese Psychological Research. 他31点。【学会発表論文】98点。

CONTENTS

[巻頭言]	谷口 泰富 (駒澤大学)	1
[CONTENTS]		2
[CROSSROAD ESSAY]	森下 高治 (帝塚山大学)	3
[特集] 日本応用心理学会第85回大会報告		5
大会委員長からの報告	臼井 伸之介 (大阪大学)	6
大会事務局・事務局幹事からの報告	中井 宏・森泉 慎吾 (大阪大学)	9
大会スタッフからの報告	篠原 恵 (大阪大学)	10
大会参加者からの報告①	加藤 恵美 (静岡県立大学短期大学部)	10
大会参加者からの報告②	増南 太志 (埼玉学園大学)	11
大会参加者アンケートより	広報委員会	13
次回大会委員長の挨拶	外島 裕 (日本大学)	15
[ホープ登場 クロスロードの星]		16
(41) 学位とりました	大門 耕平 (近江兄弟社中学校)	16
(42) 若手奨励賞	大工 泰裕 (大阪大学)	16
(43) 論文賞	宮川 裕基 (帝塚山大学)	17
(44) 発表賞	高木 玉江 (大阪健康福祉短期大学)	18
(45) 発表賞	松田 祐輝 (帝塚山大学)	19
(46) 発表賞	竹内 久美子 (和洋女子大学)	20
[職場探訪]		21
①労働科学研究所	工藤 大介 (労働科学研究所)	21
②交通事故総合分析センター	小菅 英恵 (交通事故総合分析センター)	22
[会員だより]		24
①北海道地震	山本 勝則 (天使大学)	24
②ケンブリッジ留学記	川地 亜弥子 (神戸大学)	25
[BOOK REVIEW 本を出しました]		26
●『セックス／ジェンダー ー性分化をとらえ直すー』	上瀬 由美子 (立正大学)	26
●『改訂 ヒューマンエラーの心理学入門 ー発生過程の理解と対策ー』	深澤 伸幸 (松蔭大学)	26
[書評 おすすめの1冊]		27
●『自閉スペクトラム症の理解と支援 ー子どもから大人までの発達障害の臨床経験からー』	山本 勝則 (天使大学)	27
●『数学する身体』	小橋 眞理子 (立正大学)	27
●『自閉症の世界 ー多様性に満ちた内面の真実』	佐々木 美智子 (広報委員)	28
[海外最新事情]		29
国際応心・モントリオール報告	蓮花 一己 (帝塚山大学)	29
学会通信		31
新体制のスタートにあたって	藤田 主一	31
国際応心・英文特集号への投稿案内	角山 剛	31
齋藤勇記念出版賞	外島 裕	32
機関誌編集	軽部 幸浩	33
広報	田中 真介	33
企画	臼井 伸之介	34
学会賞	木村 友昭	35
事務局	市川 優一郎	36
応用心理学ハンドブック	藤田 主一・古屋 健	36
学会史編纂	藤田 主一	37
関連学会の大会情報	広報委員会	38
学会だより		39
2018年度日本応用心理学会学会賞		39
入会申込書		40
応用心理士資格認定申請のご案内		41
編集後記		42



● 研究活動を通しての貴重な体験

2000年、2002年にICPやICAP*で、また応用心理学研究(2005)で筆者は働く人たちのライフ・スタイルに関する国際比較研究を発表していますが、私の生涯研究テーマは、[職業行動に関する研究]です。

人が、生涯を通して仕事・職業とのかかわりが大きな課題であるとの認識で、この研究が自らの活動で社会に少しでも役立つことが出来ればとの思いです。

当初、30年前に在阪の大学仲間とNIP研究会(New Industrial Psychology)を作りました。仲間8名が、新しい産業心理学を模索したいという希望をもってフリーターキングを続け現代の産業社会についてまず話し合う方法論を取りました。中心テーマは、産業社会のなかでの働く人々の心理です。

そこで、自身の中に働く人たちは何を考え、何を感じ、何を求めて生きていくか、生きようとしているか、という在職者のライフ・スタイルに対する問題が定まりました。この原点の問題に取り組むには、マクロ的視点としてフィールドスタディからの接近を、一方、ミクロ的視点として在職者のカウンセリングからの接近(幸い在職者に向き合う機会を駆け出しの時から得た)、この二本柱で研究と実践を展開してきました。

恩師である武田正信先生(関西学院大学)や大阪大学時にお会いした太城藤吉先生(労研を経て大阪大学、のち関西大学)いずれも故人から徹底的な現場主義を叩き込まれました。また、日本応用心理学会では私に運営委員に加わるようにお話を戴いた当時(財)労働科学研究所の心理部門の責任者であった越河六郎先生からも、研究者は現場に入ってこそ研究が出来ると説かれていたのがベースにあります。

そのような中、国内の在職者の研究、労使から要請があった従業員意識調査、労働組合による意識調査、そして自ら取り組んできた在職者のライフ・スタイル研究を積み重ね、身近なアジア地区の現地に出向きました。自らの関心は、働く人た

ちの仕事の取り組み方が異なっているのではとの国際比較研究です。

訪れた国は、限られていますが、タイ、中国、インドネシアでした。タイの受け入れ企業の日本からの出向役員は、現地で調査、ヒアリングをする場合の基本は2つあり、一つ目は言葉を話すことが出来ること、そして二つ目はその国の料理を食べることが基本と教えられました。タイと中国は、日本に来ていた留学生を連れて、調査票の翻訳はタイでは留学生と現地に出向の日本人とタイ人の助けを、中国では大学院生の助けを借りて行いました。

一方、インドネシアは、実は小学校の同窓会が50年ぶりに京都で開催された時に、親友からジャカルタで暮らしている森下もよく知っている同級生がいると聞いたのがきっかけでした。早速、結婚でジャカルタに在住の女性に手紙を出して了解を取り付け、事前準備のために一年前に訪問しました。彼女の夫君はインドネシアの観光大臣でした。住まいも大統領官邸の敷地の中に住んでいて、一年前の事前訪問時に招待を受け公邸を訪問しました。ガードマンが内と外で15名、メイドさんが中国では5名、運転手を2名擁する日本では考えられない暮らしでした。調査票には、現地に出向の日本人とインドネシア人が翻訳作業に関わってくれました。

古い話で恐縮ですが、1999年ジャカルタに出向いた私は、行く一週間前から政情不安で、大阪の本社の人事担当の役員からは場合によって延期するようにと言われていました。2日前に現地の日本人社長から受け入れの許可が出たので予定通り出発、ジャカルタの国際空港には会社の方が迎えに、前日8名の死者が出て国中が混乱していたので暴徒からの危険を避けるため、空港から高速道路は使わず宿泊先のジャカルタヒルトンに遠周りに着いた有様でした。翌日、予定通り工場に出向くために、朝のイスラムの祈りの集会在6時30分過ぎに終わる前に中心部から出るために毎朝5時30分に迎えが来ました。滞在期間中の睡眠は、4時間弱、その時に朝礼時にはインドネシア語の挨拶

援を行う必要がありました。そのためにふた月前から、インドネシア語を猛勉強しました。

本格的な調査とヒアリングは二日後から開始、日本語が分かるインドネシア人のサポートを得て丸々一週間当該工場の現地従業員に接しました。照明の器具を作る工場で生産ラインは女性の従業員が多くいて、工場内には、イスラム教徒がいるために礼拝所が設けられ信仰活動と労働、生活を展開しているのを目の当たりに見ました。人の生活は、仕事のみならず、非労働の地域社会活動、趣味や友だちとの語らいの余暇の部分、家庭・家族、それに宗教・信仰と言った諸活動で成り立っています。

帰国に際し空港まで送ってもらう途中に私の乗った車が暴徒に取り囲われました。役員さんがかとっさに現地の運転手にお金を渡すように指示、渡した途端に彼らは車から離れ、その後空港に到着、役員らの誘導のもと搭乗手続きをして別れました。航空機に乗るまで、過度な緊張状態が連日続いていましたが、極めつけは帰国の日の暴徒による襲撃でした。あの時に役員の方の明確な指示がなければ‘邦人襲われる’と、日本でもマスコミで取り上げられたかと思います。人間の緊張の糸が切れる状態とはこのようなことかと初体験をしましたが、それは今まで覚えていたインドネシア語の通常会話ができる程度のものをすべて失った経験でした。

ところで、いろんなところで若い研究者に私から汗をかく研究をしてほしいと常に話しています。自身の研究が社会にとって、どれほど重要か、私の場合は働く人たちにどれほど役立っているか、一人ひとりがこの世に生を受けた限り、幸せでかつ充実した生活をやり遂げる、それを私たちがどう応援するか、メンタルヘルス不調を多く抱える働く人たちに対して、言葉を代えるならどうサポートするかが今まさに問われていると思います。

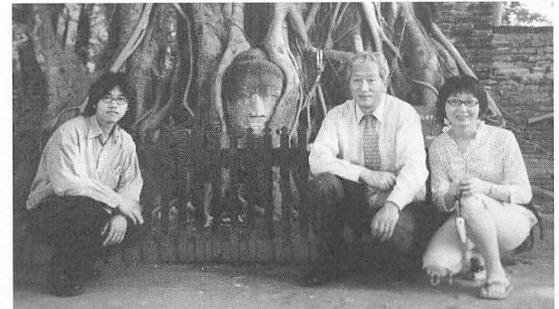
インドネシアでの経験は、汗をかくではなく、冷や汗をかいてしまいましたが、どんなことがあっても強く生きること（VITA）を学びました。これも研究に取り組む際に生じてきた貴重な体験

かと思います。いま第一線に輝いていらっしゃる皆様、これから輝こうとされる皆様には、対「ひと」との関係づくりは重要であると思います。一人の力は、弱い。研究仲間と議論し合いながら取り組んで行くことは実に楽しいことです。研究の取り組み、研究は、冷静かつ情熱をもって、関係（かかわりを持つ）する組織、団体、内部、外部の人、取り巻きと連携をしチームで、プロジェクトで、縦横に張り巡らして動いていくと成らないものまで成り立つことが可能かと思っています。

*ICAP (2010) のアテネで夕方からのオープニングセレモニーを前にホテルに到着後、すぐ昼の街中に出ました。その時にパスポートを盗まれました。3日後に奇跡的に戻ってきました。アテネ警察によると善良なスリに盗まれたので出て来たとの話。皆さまも絶対戻ってこない国際窃盗団だけは気をつけましょう。



ジャカルタ郊外の照明器具工場で調査を行うために現地従業員と準備をしているところ。



タイ・アユタヤ工場でのヒアリング調査が終わって、近くの遺跡を訪ねたひととき（タイ留学生と中国留学生）、インドネシア語は少し出来ました。タイ語は難しく読むことはダメで、中国語、タイ語どちらも難しく挨拶は少しだけ。

森下 高治（もりした・たかはる）／ 関西学院大学大学院教育心理学専攻博士課程修了。文学博士。現在、帝塚山大学名誉教授/NPO法人大学院連合メンタルヘルスセンターシニアフェロー、元日本応用心理学会理事長、名誉会員。産業心理臨床入門、働く人のメンタルヘルス対策と実務（ナカニシヤ版）、仕事とライフ・スタイルの心理学（福村出版）単著、編著など。



日本応用心理学会 第85回大会報告 大阪大学大会

日本応用心理学会
第85回大会



会場：人間科学研究科/人間科学部

第85回大会を終えて

白井 伸之介
(大阪大学)



日本応用心理学会第85回大会は、2018年8月25日(土)・26日(日)の2日間、大阪大学人間科学部(大阪府吹田市)において開催されました。この年の夏は、大阪府北部を震源として発生した震度6弱の地震(6月)、西日本を中心に大きな被害をもたらした水害(7月)、そして全国各地で40°越えを連日記録するという酷暑など、近年稀に見る自然の脅威を感じた年でした。そのような時に無事に大会が開催出来るのか、特に開催日が近づくにつれ、台風の襲来に気を揉む毎日でしたが、皆様のお陰を持ちまして何とか無事に終えることができました。このような状況におきましても、大会では会員・非会員合わせて約240名という多数の方々にご参加下さいました。皆様には、大会実行委員会を代表して厚く御礼申し上げます。

大阪大学人間科学部は1972年、人間をめぐる現代の多様な問題を、学際性、文理融合の視点から解決すべく、文学部の行動学、社会学、教育学の教員が核となり、日本で最初の「人間科学部」として誕生しました。本学部が日本応用心理学会大会を担当するのは今回が初めてのことでしたが、大会の概要を会員の皆様に以下ご報告させていただきます。

■ 理事会

大会前日8月24日(金)の15時半から人間科学部会議室にて理事会が開催され、理事、監事、名誉会員など計27名の先生が出席されました。本年4月より藤田主一理事長(再任)、古屋健副理事長を始めとする新役員体制となっており、会議では、理事長挨拶の後、各理事の自己紹介から始まり、約2時間にわたり活発な討議が行われました。

理事会終了後は、人間科学部から徒歩5分の距離の、大阪大学医学部学友会館内にある銀杏クラブにて、理事懇親会を開催しました。会では名誉会員である長塚康弘先生、森下高治先生の挨拶を挟み、和やかな雰囲気のもと、出席者の交流促進の場として懇親が進みました。

■ 研究発表

近年の応用心理学会では、ポスター発表のみとする大会が多いですが、今年は口頭発表も含めることにしました。

口頭発表会場は1日目午前中に2セッションを並行し、計10件の発表となりました。発表時間は質疑を含めて18分としましたが、座長の手際の良い進行により、活発な質疑とともに、ほぼ予定通りの時間に終了することが出来ました。座長をお願いした山本睦先生、関陽子先生、伊東昌子先生、松本友一郎先生には改めて御礼申し上げます。

ポスター発表は、両日の14時45分から16時45分まで、人間科学部本館に隣接する東館内にあるユメンスホールを会場として実施しました。発表数は1日目43件、2日目43件の計86件でした。会場では発表者や聞き手により、ポスター間の通行の妨げが生じない程度のスペースの確保に尽力しました。筆者も参加しましたが、発表者の説明、質疑、議論がそこそこで熱く行われていました。皆様が充実した時間を持てたことを切に希望する次第です。

■ 会員総会

1日目お昼の時間帯に会員総会が開催されました。今年も会員の方にはお弁当を食べながらの総

会になりました。恒例に従い、大会委員長が議長に選出され、議事を進行しました。決算・予算の承認、会則等の改正の承認の後、名誉会員の候補者として、大坊郁夫先生、田之内厚三先生、内藤哲雄先生の本学会での活動歴が紹介され、満場一致で承認されました。議長退任後、学会賞の表彰（受賞者：宮川裕基氏・谷口淳一氏、豊沢純子氏・竹橋洋毅氏）と、若手会員研究奨励賞（受賞者：大工泰裕氏）の表彰があり、最後に2019年度第86回大会の大会長を務める外島裕先生（日本大学商学部教授）からのご挨拶がありました。

■ 特別講演

大会委員会企画特別講演は1日目の午後、「行動経済学とナッジ」と題して、大阪大学大学院経済学研究科の大竹文雄教授にご講演頂きました。大竹先生はわが国の行動経済学の第一人者であり、また本年3月まで、NHKの「オイコノミア」という番組に6年間出演されたこともあり、広く知られた先生です。

講演ではまず行動経済学の主要な概念である、損失回避、現在バイアス、社会的選好、ヒューリスティックス、そしてナッジについて説明があり、またそれら研究から得られた知見を公共政策など、現実の施策に反映させている実践例などが具体的に解説されました。特にナッジは特定の行動を意識的・無意識的に促進させたり、また望ましくない行動を抑制したりするよう方向づける機能を持ち、安全行動学を専門とする著者は、有効な事故防止対策に展開しうる新奇な概念であると大変興味深く拝聴しました。講演時間が1時間と短かったこともあり、十分な質疑の時間は取れませんでした。講演後多くの会員が個別に質問に来られていました。

■ シンポジウム

2日目の午後には、「心理学諸領域から交通安全を斬る」と題する大会企画シンポジウムを開催しました。話題提供者は、独自の視点から交通安全研究を実施している若手の研究者であり、大谷

亮氏（一財日本自動車研究所）からは「子どもの交通事故低減に向けた安全対策 ー心理学的観点からのアプローチ」、小菅英恵氏（公財交通事故総合分析センター／筑波大学大学院）からは、「発達障害児・者の交通事故リスク：ADHDの注意特性に関する基礎的研究を中心として」、島崎敢氏（国研防災科学技術研究所）からは、「お得な防災行動と褒めて伸ばす安全運転 ー安全な行動を誘発する心理学的アプローチ」と題する、大変興味深い話題を提供頂きました。3名の発表を受けての指定討論者は志堂寺和則氏（九州大学大学院システム情報科学研究院教授）にお願いしました。指定討論者のコメントと話題提供者のそれに対する回答の後、司会の中井宏氏（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）がフロアに直接指名して意見を求めるなど、熱い議論が展開されました。

■ 自主企画ワークショップ

本大会では4演題の申し込みがあり、1日目午前に「臨地でのマッサージに必要なリスクマネジメント」（企画：大野夏代先生）、2日目午前に「安全教育におけるネガティブデータから学ぶ（企画：森泉慎吾先生）、「カウンセリング、心理療法へのアジアからの発信（2）（企画：林潔先生）、「スポーツにおける体罰を考える」（企画者：市川優一郎先生、藤田圭一先生）が開催されました。いずれも現代社会のまさに時宜を得た重要課題をテーマとしており、各会場では、シンポジウム形式や参加者の体験形式など、それぞれの個性が表れたワークショップとなり、参加者からも高い関心が寄せられていました。

■ 学会研修会

研修会Aは1日目午後に、松浦常夫先生（実践女子大学人間社会学部教授）による「人に着目した応用心理学：交通心理学の場合」、研修会Bは2日目午後に、平井啓先生（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）による「公認心理師と心理コンサルテーション・心の健康教育の理論と実践」

と題した研修が実施されました。著者はどちらも受講しましたが、情報量が多く、実践に役立つ素晴らしい内容であったと感じました。

■ 懇親会

懇親会は1日目17時30分より吹田キャンパス内の大阪大学医学部附属病院14階にあるスカイレストランで開催しました。吹田キャンパスは1970年に開催された大阪万国博覧会の跡地横にあり、懇親会会場からは隣接する万博記念公園と太陽の塔を見下ろすことができました。当日は好天気であったことから、約100名の参加者からはお料理も含めて、大変好評を得ることが出来ました。会は、藤田理事長、臼井大会長の挨拶の後、森下高治名誉会員の熱のこもったスピーチと乾杯で賑やかに始まりました。途中、第84回大会の優秀大会発表賞の受賞者（片岡杏友氏、高木玉江氏、松田祐輝氏、竹内久美子氏、染矢瑞枝氏、入山茂氏、宮島健氏）の表彰があり、受賞者で懇親会に参加された方からスピーチを頂きました。会では特別講演を依頼した大竹先生もご参加下さり、賑やかな歓談が続きました。そして盛況のうちに、次回大会長の外島裕先生の締め挨拶を持ってお開きとなりました。

■ 大会委員会から

昨年の立正大学での大会前に、藤田理事長から学会事務局および学会事務局委託先を移転予定であることを伺いました。その時はピンときませんが、学会業務委託先の移転は、極端な話それまでの大会開催のノウハウの初期化を意味し、それもあって、大会準備はまさにカオスの世界でした。大会を終えて、よくまあ無事に開催出来たものだ、と正直不思議な気分です。そこには、いつも細やかなお気遣いを下さった藤田理事長、大会開催に係る様々な問い合わせに的確にお答え下さった前大会長でもある古屋副理事長および立正大学八木善彦先生、種々の学会事務作業をご担当頂いた市川優一郎事務局長、HP作成や大会申込システム作成などテクニカルな作業を一手

にお引き受け頂いた軽部幸浩先生の各先生に負うところ大と思っております。ここに深く感謝致します。また、学会理事の先生方、大会事務局業務を携わって頂いた国際ビジネスセンターの皆様にも厚く御礼申し上げます。

最後に本大会は、大会事務局長の中井宏准教授、事務局幹事の森泉慎吾助教がいなければ、首尾良く開催できませんでした。実際、大会委員長は篠原一光大会副委員長と相談しつつ、大会の枠組み作りや方向づけをしたに過ぎませんが、大会の実務は2人が取り仕切っていました。至らぬ点多々あったかと思いますが、もし本大会が高評価を得たのであれば、それは主にはこの2人の功績であると言っても過言ではありません。また大会委員として、大阪大学の太刀掛俊之教授、綿村英一郎准教授、上田真由子助教、寺口司助教、北村昭彦助教、富田瑛智助教に、大会スタッフとして、32名の大学院生、学部学生に大いに尽力してもらいました。皆さん、ありがとうございました。



臼井 伸之介(うすい・しんのすけ) / 1956年 兵庫県生まれ。大阪大学人間科学部卒業、大阪大学大学院博士後期課程単位取得退学。大阪大学人間科学部助手、労働省産業安全研究所研究員、大阪大学人間科学部助教授を経て、2003年4月より同教授。博士(人間科学)。専門は産業心理学、安全行動学。日本応用心理学会常任理事、日本心理学会理事、産業・組織心理学会理事など。

第85回大会開催に漕ぎ着けるまで

大会事務局長：中井 宏
(大阪大学)

大会事務局幹事：森泉 慎吾
(大阪大学)



まずは、大会2日間を無事終えられたことに大会事務局としてホッとしている反面、大会開催にあたり、大会参加者の皆さまには様々な点でご不便をお掛けしたことを深くお詫び申し上げます。事前に、頭の中で大会当日の流れを何度も何度もシミュレートし、万全を期したつもりでしたが、それでも至らない点が多々あったかと思えます。

2018年度から学会本部の事務局が株式会社国際ビジネス研究センター (IBI) 様へ変わったこともあり、我々大会事務局とIBI様との役割分担などは特に日々手探りでした。右も左も分からない状況なので、2017年7月には、中京大学 (第81回大会の開催校) の向井希宏先生、尾入正哲先生、松本友一郎先生を訪問させて頂いたり、また立正大学 (第84回大会開催校) の古屋健先生、八木善彦先生には何度も大会関連のお問い合わせをさせて頂きました。ご多用にも関わらず、諸先生方にはご丁寧に対応頂きましたことを厚く御礼申し上げます。特に助かりましたのは、完成度の大変高いマニュアルを頂戴できたことです。今後の大会でもバイブルとして大活躍する、いわば「学会の資産」のようなもので、最初にご作成された方には頭が下がる思いです。

2017年12月に大会HPが公開され、大会事務局運営が実際にスタートしてからは、発表申込件数が締め切り直前まで少なくヒヤヒヤしたり、近年稀にみる猛暑でしたので、参加者やスタッフの熱中症対策に労力を注いだり、とにかく当日まで多難続きでした。今回の大会では、事務局長と事務局幹事の2名体制で主だった準備をしておりましたので、行き届かない箇所も多々あったのですが、当日は、大会委員の先生方を始め、アルバイトの

学生さん達が臨機応変に対応してくれ、我々の不手際をカバーしてくれたお陰で、何とか大会を終えることができたと考えています。

ところで、例年、大会プログラムと論文集は同じ表紙デザインでしたが、今年度は違っていたことにお気づきでしょうか。大会プログラムは太子のぞみ先生 (同志社大学)、論文集は菊池勇哉先生 (宝塚医療大学) にご作成頂きました。これらは、大会関係者で表紙決めのコンペを行った中で特に優れた作品の2点です。両先生にはこの場を借りて御礼申し上げます。また、大会委員長のたつての希望により、いずれの表紙にも「太陽の塔」の写真が使用されています。2018年3月より塔内部が一般公開されるようになって、世間の注目も高まる中、画像の使用に際して著作権の面でクリアすべき手続きもございましたが、大阪府日本万国博覧会記念公園事務所様のご理解・ご協力をいただき、両冊子を完成させることができました。

最後に、大会までの準備作業を思い返しますと、「もう一度やって」と言われてもお断りですが、本大会に参加された先生方が「参加して良かった」と少しでも思ってくださったならば、辛かった準備作業もポジティブに「認知的再評価」できるかなと思います。

中井 宏 (なかい・ひろし) / 1982年 香川県生まれ。大阪大学人間科学部卒業後、同大学院人間科学研究科博士後期課程修了。大阪大学大学院人間科学研究科助教、東海学院大学人間関係学部講師、准教授を経て2018年4月より大阪大学大学院人間科学研究科准教授 (着任後、本大会準備へのエフォートは80%に達するか?)。専門は交通心理学、産業心理学。博士 (人間科学)。2005年より日本応用心理学会員、2018年より学会理事。応心での思い出は、2008年の学会賞 (論文部門) 受賞と2014年の第81回大会 (中京大学) 懇親会でのヒエロの補助 (アドリブ)。

森泉 慎吾 (もりいずみ・しんご) / 1984年 長野県生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科助教。博士 (人間科学)。専門は産業心理学。2009年より日本応用心理学会員。本年度の大会にて、学会開催がいかに大変かを実感する。来年度以降の大会は、スタッフさんに対して今まで以上に優しい気持ちを持って参加できそうな今日この頃。

大会参加で 得られたこと

篠原 恵
(大阪大学大学院)



私は、日本応用心理学会85回大会では、スタッフとして設営や案内業務を行い、参加者としてポスター発表をさせていただきました。前日準備を含めた3日間を通じて、非常に有意義な経験をさせていただきましたと感じています。

大会スタッフとして、私の印象に残っていることは、運営側と参加者側の双方の心遣いでした。私は今回初めて大会の運営に関わりましたが、大会委員会の皆さんが、私の思っていた以上に参加者の気持ちを考え、様々な工夫を凝らしていることに感服しました。また、参加者の皆さんからも、会場までの道で案内をしている私に対して体調を気遣っていただき、人々の優しい心に触れることができました。長期にわたり継続して開催されている学会には、参加者側、運営側双方の心遣いが深く関わっていると感じました。このような学会の運営に携われたことは、私にとって貴重な機会となりました。

発表は、「FX投資経験者の未来予測における価値観の影響」というタイトルで行いました。株式相場や外国為替相場は、主に経済要因（景気や金利の変動等）からの影響を受けて変動すると言われていて一方で、心理学的要因（個人の特性やチャートと呼ばれる過去の変動履歴をどのように見るかなど）の影響は重視されてきませんでした。私は、心理学的要因の投資判断に対する影響という観点から、投資行動の変動メカニズムを解明できるのではないかと研究を行ってきました。

私の研究では投資という実社会の経済活動を扱っているので、本大会に参加し、様々な実務上の解決手法について知れたことは良い経験となりました。医療や交通心理の分野の発表からは、あ

る問題解決の手法を提示するだけでなく、その手法では取りこぼされてしまうような個々のケースの解決にも取り組むという姿勢が感じられました。また、ポスター発表にお越しいただいた先生方には有益なコメントをいただき、自分の研究が社会にどう還元できるかを改めて考える機会を得ることができました。この場を借りて御礼を申し上げます。

篠原 恵(しのはら・めぐみ) / 大阪大学人間科学部卒業後、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。現在、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程1年。研究テーマは、投資など賭け行動に影響する心理学的要因の解明。

大会に参加して

加藤 恵美
(静岡県立大学短期大学部)



今年、日本応用心理学会に入会いたしました。このたびの第85回大会に初参加、そして臨床・福祉の領域で、「保育現場における親を喪失した子どもへの支援の実態と課題：保育士の語りのテキストマイニング分析」をテーマにポスター発表をさせていただきました。

様々な分野の方々がおいでくださり、お話を伺うとともに、ご質問や研究方法へのご助言、さらには励ましのお言葉まで賜り、研究への貴重な示唆と活力をいただけましたこと心から感謝申し上げます。心理学をはじめとして多岐にわたる分野の方々と交流させていただき、応用心理学会の自由な気風を体感いたしましたことも貴重な経験となりました。

本研究に取り組むきっかけは、病気で親を失った子どものグリーフケアプログラムへの参加です。遊びを用いたプログラムが有効であることはわか

りましたが、参加するには様々な条件が整う必要があることに気づきました。そして、子どもの置かれている環境にかかわらず、日常生活レベルでケアが行われることが大切だと考えるようになりました。

子どもにとって親との離別は、その心身と日常生活に影響を与える出来事です。病気や事故による死別だけでなく、自死や離婚といった“あいまいな喪失” (Boss 1999) を体験し、トラウマを抱える子どもも少なくありません。しかし、体系的な支援は行われていない状況です。そこで、子どもの福祉の専門家である保育士に、喪失体験に関する基本的な知識とスキルを身につけてもらうことによって、多くの子どもがケアの機会を得られるようになることを考えています。この知識・スキルのひとつとして、言語能力の未熟な子どものために、遊び(ホスピタル・プレイ)とアート(グループ表現セラピー)を用いることを検討しています。今大会では、この支援方策を開発するために行った、保育士への聞き取りによる実態調査の結果を発表させていただきました。

このような大会参加について振り返る機会をいただき、皆様に感謝を申し上げます。応用心理学会の目的である文化と福祉の向上発展に少しでも寄与できるよう研究活動に取り組んでいきたいと気持ちを新たにしました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

加藤 恵美(かとう・えみ) / 静岡県立大学短期大学部社会福祉学科助教。専門は社会福祉学で、保育における子どもの喪失体験への支援について研究を行っている。幼稚園教諭を経て、2004年岩手県立大学大学院社会福祉学研究科修士課程修了。

改めて「応用」 を意識する

増南 太志
(埼玉学園大学)



日本応用心理学会第85回大会において、「学生の抱く有能感に関する研究Ⅰ—友人選択及び大学生活充実感との関連性—」という題目でポスター発表をさせていただきました。埼玉学園大学の尾形和男先生との共同研究であり、尾形先生の研究と共に一連の発表として報告させていただきました。

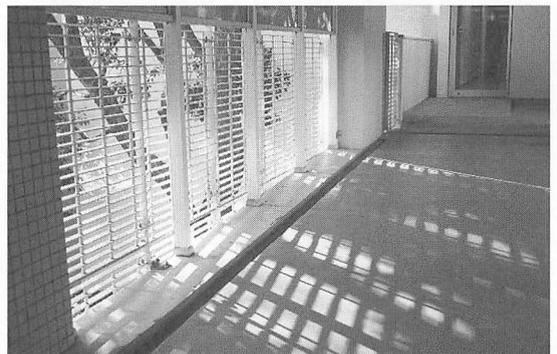
日本応用心理学会で発表するのは2回目となりますが、多様な研究に触れられる学会だと感じております。私の研究では、大学生の「有能感」や「自尊感情」などを扱っているため、それに関連する研究を見て回りましたが、他にも「投資」などあまり関係しないけれども興味深い研究を見ることができました。今後も様々な研究に触れる事を楽しみにして参加したいと思えます。

さて、学会の名称にあるように、「応用」というからには、研究によって得られた知見を社会に還元していくことが重要です。私の研究では、大学生の有能感を類型化し、その類型ごとに、友人をどのように選んでいるか、それが大学生生活充実感の違いに影響しているかどうかを検討しました。その結果、大学生の有能感のあり方が、友人選択や大学生生活充実感と関連する事が明らかとなったのですが、こうした研究結果を、学生達に還元していくことが重要となります。発表を聞いてくださった先生からも、そのような助言を頂きました。そのため、大会が終わってからも、どうすれば「応用」につながるだろうかを考えていました。1つは、有能感のあり方に関して問題を抱える学生を支援し、改善を図っていくことが考えられます。そのためには研究をより深めていく必要があるでしょう。もう1つは、大学生になる前にもつ

と早い段階で予防的な対策をとることです。その場合は、小中高の先生方と連携していくことが必要になるでしょう。また、有能感に関して多くの人が理解し、その大切さを認識できるようにすることも、「応用」の1つになり得ると考えられます。考えてみれば「応用」の方法は様々にあります。しかし、それを意識するかしないかはとても重要であり、「応用」を意識しなかったら、研究者同士で研究結果を話し合うだけで終わってしまいかねません。今回の大会では、その点を意識させられた気がします。

今後は、学生への還元という「応用」の視点をより大切にして、研究を続けるとともに、日本応用心理学会に成果を報告していきたいと思います。

増南 太志 (ますなみ・たいじ) / 1978年 島根県生まれ。2007年 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科修了、博士(行動科学)。筑波大学人間総合科学研究科非常勤研究員、筑波大学障害科学系準研究員、川口短期大学を経て、2015年から埼玉学園大学人間学部准教授として勤務。学生の有能感の他、発達障害などを研究。



▲ ポスター発表会場へとつづく廊下の風景より

▶ 1 日目 (2018/ 8 /26) ◀

① 森下 高治 (帝塚山大学)

研究分野：産業心理臨床領域

■ 主な研究テーマと研究方法

(テーマ) 産業現場における応用心理学、学徒の活躍に関する研究

(方 法) フィールドを通し、メンタルヘルス対策を促進するためのツールの開発とカウンターリングでの成果の測定。

■ 大会の感想

- ・ 臨地でのマッサージに必要なリスクマネジメント
- ・ 大野先生、山本先生のワークショップに3年連続して参加、実りある体験が出来ました。ワークショップは値打ちがあり、多くの皆様に勧めたいと思います。ただ、同時平行の口頭発表に参加できなく、残念でした。
- ・ 臼井先生のもと、料亭下鴨茶寮の京みやび弁当は美味しくいただきました。

③ 幡瀬 弘志 (MSD)

研究分野：臨床・認知

■ 主な研究テーマと研究方法

(テーマ) アルコール問題、多飲問題

(方 法) (1) 家族支援の視点より
(2) DV/自死の視点より
(3) 罰と報酬の視点より

■ 最近気になっていること

- (1) 道路標識
- (2) 食品写真の撮影角度とおいしさの感じ方
- (3) 福祉食のもりつけ、ヘルパーの需給。

② 松田 浩平 (東北文教大学)

研究分野：人格心理学、心理測定

■ 主な研究テーマと研究方法

(テーマ) 生理的行動指標によるパーソナリティの測定

(方 法) 実験的方法によるパーソナリティ測定の方法論についての実証研究

■ 大会の感想

応用性をキーワードに広い分野の人が集まる初心者にやさしい学術大会 (であり続けてほしい)。

■ 最近気になっていること

質問紙法で示されたパーソナリティ特性は個人が自分に対するセルフレポートにすぎないのではないか。自分で評価して自分で書いて「当たっている！」に意味はあるのか？

④ 田中 真介 (京都大学)

研究分野：発達・教育・人格

■ 主な研究テーマと研究方法

(テーマ) 乳幼児期、児童期、青年期の発達と教育計画

(方 法) ① 神経生理学(障害療育の生理的基礎)
② ヒトとチンパンジー乳幼児期の発達の特質と過程の比較
③ 沖縄の離島でのフィールドワーク

■ 大会の感想

- (1) 参加者を温かく迎え入れ、受けとめる雰囲気を感じられて、とてもよかった。
応心大会の取り組みそのものが臨床的であるとともに、青年期・成人期・中高齢期の発達を支える営みとなっているのではないかと思います。
- (2) 下鴨茶寮のお弁当、京都にいたのにいただいたことがありませんでした。美味しかったです。

■ 最近気になっていること

- (応心への3つの願い) key wordsのメモです。
- (1) 大会の楽しさ、独自のカラーの追求、人と人とのつながりのあたたかさ。
 - (2) 実践性～社会的柔軟性～歴史性
 - (3) 夢を自由に語り合える場・時間・機会・条件づくり

▶ 2日目 ◀

⑤ 外島 裕 (日本大学)

研究分野：産業・組織心理学

■ 主な研究テーマと研究方法

(テーマ) リーダー開発における影響力拡大のための自己覚知について

(方法) 多面観察評価(360度フィードバック)や心理検査をステップをかさねて自己覚知をうながし、柔軟で多様な行動拡大を可能とする実践的な事例研究。

■ 大会の感想

実践的、実際的な問題意識による研究が多く行われており、応用心理学の質の向上が感じられる。アットホームな雰囲気が続くことを期待する。

■ 最近気になっていること

まずは、なんとんでも2019年に日本大学商学部で開催予定の本学会の充実を心より祈ります。みなさま、本日はだいまより研究発表の準備を!!!

⑥ 高木 玉江 (大阪健康福祉短期大学)

研究分野：発達心理

■ 主な研究テーマと研究方法

(テーマ) 幼児期初期における自己認知について

(方法) 鏡に映る自分を見て認知できるかどうかを検証。マークテスト課題の手法を用いて、反応や行動観察。自己認知をし始める時には、他者を認めるようになり、表象や言葉等いろいろな面で発達のにも質的に変化していく。

障害児も同じような経過をたどることが今回の研究で明確に。

■ 大会の感想

スタッフの皆様のご丁寧な言葉かけでとても助かりました。プログラムを開いて見ている時にも案内を丁寧に行ってくださいました。暑い中、大会運営ありがとうございました。お弁当もとても彩りよくおいしかったです。

■ 最近気になっていること

青年期の発達過程で自己を明確にしていく中で、ボランティア活動は有効であるか等、ボランティア活動に行った学生の心の変化をリサーチしていきたい。

⑦ 竹田 達生 (帝塚山大学)

研究分野：発達障害 特にASDについて

■ 主な研究テーマと研究方法

(テーマ) ASD傾向をもつ人の精神的研究

(方法) 質問紙をメインに行っている

■ 大会の感想

何でもありな研究発表が、いい刺激になりました。

■ 最近気になっていること

どこからが心理学で、どこまでが心理学でないのか(何が心理学の方法論にたえるのか?)。

⑧ 田中 真介 (京都大学)

研究分野：発達・教育・人格

■ 大会の感想

大会企画「心理学諸領域から交通安全を斬る」について

(1) 3人の先生方の話題に共通して、「注意」機構の形成と援助の問題が鍵の一つであったように感じました。JR福知山線事故のあと、音声で運転士に注意喚起するシステムが導入されています。その効果について検証した研究を期待しています。

(2) ADHDの子どもたちの「持続的注意」と「変化の検出」機能の関連、重要と思われます。そのような力を含めたADHDの子どもたちの「自己信頼性」の形成を援助していくための具体的な方法について、今後の研究と療育実践の発展を期待しています。

日本応用心理学会第86回大会（日本大学商学部）開催のご案内

外島 裕
（日本大学）



この度は、日本応用心理学会第86回大会を、日本大学商学部にて開催させていただくこととなりました。学会員の皆様の、日頃からのご研究の発表と、ご議論をふまえました、さらなるご発展の一助となりますように、大会準備委員会一同ご支援の努力を申し上げたいと存じます。

皆様の、より深い関係性によりまして、応用心理学の社会への貢献が輝きますように、ご研鑽の成果を共有したく存じます。ご参集いただきますよう、ご予定をなにとぞよろしくお願い申し上げます。

ご参加の申し込み日程と方法、発表形式、シンポジウム、研修会テーマなど企画中です。別途ご連絡申し上げます。適宜、学会ホームページなどをご参照ください。

- 1) 年次大会日時：2019年8月24日(土)・25日(日)
(理事会は8月23日予定)。
- 2) 場所：日本大学商学部 東京都世田谷区砧5-2-1。
- 3) 会場までのアクセス例：(経路など日本大学商学部ホームページをご覧ください)。

最寄りの交通機関：小田急線（新宿発）「祖師ヶ谷大蔵駅」あるいは「成城学園前駅」下車。

- ①各駅停車（新宿駅より約21分）「祖師ヶ谷大蔵駅」下車、南方向へ徒歩約15分。
(ウルトラマン商店街のウルトラマンが小さくついている街路灯をたどると着きます)。
- ②急行（新宿駅より約14分）「成城学園前駅」下車、南口から徒歩約25分。
(南口のスターバックスの隣の道路角モスバーガーの横側に「渋谷行」のバスがあります。乗車後約10分程度。「日大商学部前」

下車)。

(注) 日本大学文理学部(下高井戸)、経済学部・法学部等(水道橋)ではありませんので注意ください。

さて、日本大学で本学会の年次大会を開催いたしましたのは今までに3回となります。1946年3月に日本大学の心理学研究室の創設者である渡辺徹先生による、終戦後の復興第1回大会。本学会で血液型による人間誤解を鋭く指摘し続けた大村政男先生は、この時には助手として受付を担当していたと伺っています。次の、第18回大会(1954年11月)も渡辺徹先生が委員長でした。そして、第71回大会(2004年9月)を、日本大学商学部で嘉部和夫先生を委員長として開催いたしました。外島は大会事務局長としてお手伝いいたしましたが、懇親会の散会頃に、去りがたい気持ちからのやらずの大雨が突然降り、会員の皆様の心の絆を感じました。当時とは、校舎も新しくなり、ドラマのロケに使われています。第86回大会は、どのような深い心の絆となりますか、晴れやかでありますように。会員諸先生方の、万難を排したご参加を心よりお待ち申し上げます。

外島 裕(としま・ゆたか) / 1949年東京生まれ。現在、日本大学商学部経営学科・日本大学大学院商学研究科経営学専攻教授。主な担当科目、経営心理学、人的資源管理論、キャリア開発の心理学。最近の研究テーマ：「リーダー開発における多面観察評価の機能と自己覚知」(2016年)、「成人男子の10年間のパーソナリティ特性の縦断的变化に関する研究-TPI(東大版総合人格目録)全項目の因子分析尺度による相関を指標として」(2017年)、ほか組織風土に関する研究など。

学位とりました

41 大門 耕平

(近江兄弟社中学校)



★学位を取得して

「そして、(東からきた博士たちは) 家にはいって、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた。」

幼稚園のクリスマスでの劇、「博士」という響きに憧れ、博士役に立候補したことを覚えています。それから36年後の2018年9月、京都工芸繊維大学大学院より博士(学術)の学位をいただきました。博士論文の題目は、「中学校教育における学業成績を構成する要素についての研究 学習習慣・学習意欲および学習環境ならびに道徳観に着目した分析」です。成果として、中学生においては、学業成績、学習習慣、学習意欲、学習環境、道徳観が相互に関係していることをデータから示すことができました。

博士課程への進学の本質は、データを用いた生徒状況や教育効果を理解する評価項目を作成したいということでした。組織として、集団として、教育改善や生徒把握を共有することは、経験則だけではかきません。また、生徒状況を把握するために学業成績だけでは、学校の様々な教育活動の意義が見失われてしまいます。これらの課題を解決するためには、経験則や学業成績に頼らない評価項目が必要となります。

今後は、得られた知見を実際の現場で活用することを進めていきたいと思っています。学位を取れば、しばらくは満足感、充足感に浸れる時間が持てると思っておりましたが、実際は不安の方が大きく、現場での活用のために、今後もさらなる研究を積み重ねなければならないと思っています。

クリスマスに登場する博士は、空にある無数の

星を読み、進むべき道を見出しました。もしかしたら、6歳の私は、そのような博士に憧れていたのかもしれませんが。星ではありませんが、データを分析することによって、生徒のためにより良い教育を構築すること、教育の改善のために少しでも貢献できればと思っています。これからもどうぞよろしく願っています。



大門 耕平(おおかど・こうへい) / 1977年 滋賀県生まれ。明治学院大学経済学部卒業、同志社大学大学院神学研究科修了、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科修了。博士(学術)。特別養護老人ホームでの勤務を経て、2006年より滋賀県にある学校法人ヴォーリズ学園近江兄弟社中学校の教員として勤務。中学校教育をフィールドとして、学際的な研究に従事。

若手奨励賞

42 大工 泰裕

(大阪大学大学院)



★若手会員研究奨励賞受賞によせて

この度は、「社会的望ましさを排除した体罰容認度を測定する潜在的指標の開発 一紙筆版による教育現場での普及を目指して」というテーマで若手会員研究奨励賞をいただきましたこと大変光栄に思います。

本研究は、昨今問題になっている学校での体罰を扱った研究です。学校での体罰自体は昔から存在していたと考えられますが、社会問題として顕現化したのは2012年に桜宮高校バスケットボール部での事件が契機でしょう。この事件は、バスケットボール部のキャプテンが、顧問からの恒常的な体罰を苦として自殺したという非常に痛ましいものでした。

この事件以降、度々体罰の問題がニュースとして取り上げられるようになります。それと同時に、体罰を起こさないための教育である「体罰排除教育」も行われるようになりました。特に、日本体育大学では「反体罰・反暴力宣言」2013年に行って以降、将来指導者になりうる学生に対して体罰排除教育を行っています。

しかし、従来の体罰排除教育ではその効果測定を行う指標が質問紙などの顕在指標しかないという課題がありました。例えば、体罰排除に関する講義を受けた後の学生の反応を計測しても、表立って「体罰は必要」と答える学生はいないでしょう。このように、社会的な望ましさを気にした回答が、体罰排除教育の効果測定を難しくしています。

そこで、Implicit Association Test (IAT) に代表される潜在指標を使って体罰容認度を測定することを提案するのが本研究の目的になります。IATとはGreenwaldらによって開発された、反応時間などを用いて態度を測定する方法であり、測定時に意識的な統制が困難な点に特徴があります。それゆえ、社会的望ましさの影響を受けやすい偏見などの研究分野で多く用いられてきました。

本研究では、PCを用いて行うIATからはじめ、紙とペンで行う紙筆版IATを作成することを目標としています。紙筆版を開発することができれば、手軽に教育現場に導入することが可能になり、例えば体罰排除教育の前後でその効果を見ることができるようになるでしょう。本研究はまだ実施中という段階であり、完了まで少し時間が必要ですが、教育現場ですぐに使用できるテストを作成できるよう頑張りたいと思います。

大工 泰裕(だいく・やすひろ) / 2015年 大阪大学人間科学部卒業、2017年 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了、現在、同研究科博士後期課程在学中。専門は社会心理学で、特に、詐欺や体罰などの社会問題を心理学の観点から研究している。 <http://yasuhirodaiku.com/>

論文賞

43 宮川 裕基 (帝塚山大学)



この度、2018年度論文賞という名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。本論文の第二著者である谷口淳一先生、博士前期課程在学時にご指導を賜った森下高治先生、本論文の査読者の先生方、また、調査参加者の方々をはじめ、研究にご協力頂いた皆様のおかげで、1つの成果としてまとめあげることができました。この場をおかりして、心より感謝申し上げます。以下に、本研究のきっかけや主な結果についてご紹介いたします。

★研究のきっかけ

私は、苦しい時に自分を思いやることを意味するセルフコンパッションの研究をしています。セルフコンパッションとは、(1) 苦しみをあるがまま捉え、(2) 誰もが弱みを抱えているという人間らしさを理解して、(3) 慈しみの気持ちをもって、苦しみを抱える自分自身に向き合うことを意味しています。この特徴を持つ人はうまくセルフケアできる人といえます。

本研究のきっかけは、「セルフケアが上手なら、この特徴を持つ人は他者に頼らずに何でも自分で問題解決するのだろうか、あるいはうまく他者を頼ることができるのだろうか」と疑問に思ったことです。本研究では、「自分を思いやるからこそ他者にも頼ることができる」というスタンスに立ち、その実証を目指しました。

★研究成果

大学生を対象にした質問紙調査の結果、セルフコンパッションの高い人ほど、相手に対して自分の弱みを隠蔽しにくいため、その相手に援助要請しやすいことが示されました。つまり、思いやりの気持ちをもって自分に向き合えることで、自分

の弱みを素直に相手に伝えるために、その相手に援助を求めやすいといえます。

自分の弱みを他者に伝えることは相手から支えてもらうための大事な一歩です。ただし、「相手に弱みを握られる」というようにネガティブに捉えると、自分にとって脅威となるため、なかなかその一歩が踏み出せないこともあります。本論文の知見は、自分を思いやることが「助けて、困っているんだ」の一声を出す勇気を与えることを示しています。

また、セルフコンパッションの高い人ほど、援助要請に伴う相手の負担に過剰に配慮しないことや相手からの援助を無効と捉えにくいことが示されました。この知見から、セルフコンパッションの高い人は対人関係をポジティブに捉えているといえます。自分を思いやることは「人と人とのつながり」にも役立つものだと考えられます。

★今後の方向性

この賞を励みにして、今後も自分を思いやることをベースに、人々の健康や幸せに貢献する研究を続けていきます。また、日常生活、心理臨床活動に応用できるような研究を心掛けたいです。例えば、日誌法を活用するなど、日常生活で生じるリアルタイムでの対人交流や援助要請場面におけるセルフコンパッションの役割について明らかにしていく研究に励みたいと考えています。



宮川 裕基 (みやがわ・ゆうき) / 帝塚山大学大学院心理科学研究科博士後期課程修了。博士 (心理学)。臨床心理士。現在は谷口淳一教授 (写真右) の指導のもと、帝塚山大学大学院心理科学研究科研究員として研究している。また、同大学心理学部非常勤講師、三重県及び奈良県スクールカウンセラーとして活動している。

優秀大会発表賞の
受賞に関連して

44 高木 玉江 (大阪健康福祉短期大学)



★「これからも探究心をもち、 自己を磨いていきます」

この度は、第84回大会にて教育・発達・人格の第2部門で優秀大会発表賞をいただき、誠にありがとうございます。研究大会発表参加者の皆様、多数の関係者の方、厚く御礼申し上げます。研究大会発表会場では、内容に興味をもって下さる方もあり沢山の方々に発表ができたことは本当に有り難く思っております。実際に1歳半から2歳の子ども達がどのような発達の変化や反応を示すのか等、ダイレクトに質問して下さる方や研究自体を面白いと応援して下さる方もありました。これらのことが今では、私の研究での探究心の原動力にもなっております。

さて、発表させて頂きました「幼児期初期における「じぶん」の認知について—「じぶん」をどのようにみているのか—」この研究は、これまで乳幼児期初期に鏡に映った「じぶん」の像を見ての反応とタブレットPCに映る像が「じぶん」と認知しているか否かを、マークテストという技法で観察を行い、自己認知した時期の差異をまとめたものです。

自己を認知していくことは、乳児期の感覚運動的経験による感覚的自己の認知から、乳児期後期には、他者との社会的な関わりの中での関係的自己の認知をしていきます。さらに、乳幼児期初期には、よりいっそう他者との関わりの中で自己を認知し、「じぶん」の存在を認知し明確化していく時期となります。特に、生後2歳を過ぎるころになると多くの子どもたちが鏡に映った鏡像を「じぶん」としてとらえはじめる時期でもあり、自己の存在を対象化していくと考えています。この時期に鏡像に映った子どもたちは、鏡の前でと

でもユニークで、様々な姿を見せてくれました。鏡に映った自分をみて、鏡の自分に指さしたり、鏡に映った顔をみて、バイバイと手を振る。その時、鏡に映っている自分も同じようにバイバイと手を振っているのを見る姿等、様々な反応もありました。これらの子ども達の反応や変化が、研究をしていて楽しいと思える、ひと時にもなっています。これからも、自己を認知していく発達のみちすじを日々探究していきたいと思っています。

高木 玉江 (たかぎ・たまえ) / 1966年 大阪生まれ。1987年 大学卒業、保育士として乳幼児教育に関わる、2005年 立命館大学卒業、2010年 同大学院応用人間科学研究科修了。自治体の乳幼児健診や幼稚園保育園の巡回相談に携わっている。並行して佛教大学非常勤講師、現勤務の大阪健康福祉短期大学非常勤講師を経て、専任教員を行っている。臨床発達心理士、学校心理士、特別支援教育士。

発表賞

45 松田 祐輝
(帝塚山大学)

★臨床と研究

この度、応用心理学会第85回大会の懇親会におきまして、昨年度大会での発表を表彰いただきました。この場をお借り致しまして、本研究の調査にご協力いただいた施設職員の方々や、熱心にご指導下さいました奥村由美子教授にあらためて御礼申し上げます。

私は今年度に臨床心理士資格をいただいたばかりの新人心理士です。現在は精神科病院に勤務しており、右往左往しながら日々の業務にあたっています。そんな生活の中で感じざるを得ないのは「やっぱり仕事をしながら研究するのが難しいな」ということです。

大学院で心理学を専攻すると、教科書に出てく

るような先人達や、大家と呼ばれる先生方の研究人生に触れることができます。それらに共通している点、それは「実際の臨床活動で見出した仮説を研究活動の中で検証し、そこで得られた知見を再び臨床現場に還元する。こうした知的作業を繰り返すことによって、やがて臨床活動と研究活動とが一致していく姿」ではないかと思います。

一方の私は、病院で患者さんと接している時に「自分の対応は果たして適切なのだろうか」「その心理療法のマニュアル通りに接することができるのだろうか」ということばかりが気になり、研究的・創造的な視点はほとんど見失いながらも、研究の教科書通りの臨床的ケアだけを追い求める、いわば視野狭窄のような中であつたこの時期に本学会で表彰していただき、あらためて研究的・創造的視点を持ち続けることが臨床心理士のあるべき姿だということ思い起こさせていただく機会となりました。私自身にとって大変意義深く有難いことだったと感じております。

先人の先生方が至った境地に辿り着けるかどうかはわかりませんが、先人もまた長く悩ましい道程を心が折れそうになりながら歩を進めてこられたんだろうと想像します。

まずは、とにかく目の前の相手を理解しようと真摯な眼差しを傾けること、そうした日々の連続が新たな疑問や研究の種を生むのだろうと信じて今後の活動に励んで参りたいと思います。この度は誠にありがとうございました。

松田 祐輝 (まつだ・ゆうき) / 奈良県天理市生まれ。帝塚山大学大学院心理科学研究科修了。大阪府柏原市にある精神科単科病院にて心理業務に従事。システム論的家族療法に関心がある。

発表賞

46 竹内久美子

(和洋女子大学)



★はじめに

この度は、2018年度大会優秀発表賞という名誉ある賞を賜り、心よりお礼申し上げます。本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

「看護師の初期キャリア発達における組織コミットメントの変容」は、看護師の入職3年間の組織コミットメント、自己効力感、ローカスオブ・コントロールの変化と関連を、縦断的手法を用いて調査・分析した研究です。研究に携わるきっかけ、本研究の概略を、以下にご紹介いたします。

★研究開始のきっかけ

大学病院で脳神経外科の看護師として働いていた時、10人で同じ病棟に入職した同級生は、3年経つと3人になり、5年経つとなんと私1人になりました。このままではいつまで経っても専門的な知識と技術を持つチームを作ることはできないと思ったのが、研究を始めるきっかけでした。20数年前の3K(きつい・きたない・きけん)と言われていた、看護のそれも医療の最前線である大学病院の現場では、新卒看護師は3年で半数以上の人が辞め、生き残りの看護師が現場を支えています。看護師が生きいきと働き続けることのできる職場環境を考えたいと思ったのが研究の原動力となりました。

★本研究の目的

看護師が生きいきと働き続けられる職場を、組織的な側面と個人の側面から支援したいという思いに端を発し、約20年研究を続けてきました。本研究では、特に入職3年間の初期キャリアに焦点をあて、心理状況と組織適応の変化、関連を明ら

かにすることにより、キャリア発達支援の新たな知見が得られるのではないかと考えました。

★研究成果と今後の展望

入職3年間の変化では、組織コミットメントは徐々に低下しており、組織適応が不十分であることが示唆されました。さらに組織コミットメントと自己効力感は関連しており、自己効力感が直接組織コミットメントに関連するだけでなく、ローカスオブ・コントロールを媒介として間接的にも関連することが明らかとなりました。

これまでの研究を通して、看護師の初期キャリア発達を支援するうえで、個人への働きかけ、特に個人の自己効力感や自律的な判断を強化する必要があります。そのためにも、初期キャリア段階にある看護師を対象として、自己効力感や自律的な判断をする力を育成・強化するプログラムを開発し、介入研究を目指したいと考えています。これまでの机上の成果を実践につなげられるよう努力していきたいと思います。

竹内 久美子(たけうち・くみこ) / 2012年 聖路加看護大学大学院看護学研究科博士後期課程修了、博士(看護学)を取得。専門は、看護管理学。現在は、和洋女子大学看護学部に所属。看護師のキャリア発達に関する研究を継続中。

働く人々の側に立って

工藤 大介



私が所属している公益財団法人大原記念労働科学研究所では、働く全ての人々の安全と健康、「働きがい」のある人間らしい仕事の在り方を研究の中核とし、学術的な知見を基にした職場への提言や実践活動を行っています。私はその中でシステム安全研究グループに所属し、産業組織における安全文化、安全活動、そして企業における安全・ヒューマンファクター研修について研究を行っています。

現在行っている研究の一例をご紹介します。研修で使用している課題の一つとして「作業シミュレーション課題」というものがあります。私はこの課題の事例分析と内容の改良、そして効果測定に取り組んでいます。これはトランプを使った「神経衰弱」のようなゲームなのですが、まず参加者を1つの組織に所属する3つのグループに分けます。企業組織の活動を模して競争と協働を促すルール設定がしてあり、その状況下でヒューマンエラーを体験して貰うというものです。シンプルな課題ではありますが、グループ内で上長役と作業役との間でコミュニケーションが十分に行われず、カードの配置の認識にズレが生じることや、グループ間では競争に走った結果情報共有を行わず課題の解決に至らない等、安全文化研究や事故分析で得られた実際の現場で発生している諸問題を、課題の中で再現するように設計しています（応用心理学会第85回大会にて発表）。

研究所に入ってからこの課題の分析を行っていく中で、状況次第で誰にでもヒューマンエラーが発生してしまうということを実感しました。だからこそ、なぜ発生したのかという原因を深掘りし、防止するための対策を考える必要があります。し

かし、ただ「気をつけましょう」「注意しましょう」といったソフト的な対策で終わってしまうのではなく、ハード面や環境面での対策へも踏み込んでいくことが必要となってきます。ただ、ここで重要なのが「現場でできる・守れる」対策であるかということです。大学院に在籍していた頃とは違い、フィールドが企業や現場で働く人々へと変化しました。どうしてもまだ知識偏重の机上論のような考え方をしてしまうことがあり、現場目線で考えることの難しさと重要性を痛感しています。しかし、現場の目線で考えること、現場に入って行き働く人々と共に考えること、これが労働科学そして応用心理学の面白さでもあると思います。今後も現場の目線に立って、働く人々の安全のために実践活動を含めた研究に取り組んでいきたいと思っています。



▲本文中の研修課題「作業シミュレーション課題」

工藤 大介（くどう・だいすけ）／ 2011年 同志社大学文学部心理学科卒業、2017年3月 同志社大学大学院心理学研究科博士後期課程満期退学。博士（心理学）。現在は公益財団法人大原記念労働科学研究所研究員。専門は社会心理学、リスク心理学。現在は産業現場での安全研修におけるヒューマンエラー防止に向けた課題の事例分析や、改良に向けた検討を行っている。

イタルダの研究者として

小菅 英恵



＜イタルダの職場紹介＞

正式な名称は公益財団法人交通事故総合分析センターと言います。1992年の設立から26年が経過しました。当センターが設立された1992年頃の交通情勢を振り返ると、1970年以降、交通安全対策基本法の下での諸対策により減少を続けていた交通事故死者数（事故後24時間以内の死者数）が1979年を底に増加に転じ、1988年には再び1万人を超えるなど、「第二次交通戦争」とも呼ばれた時期に当たります。

当センターは、このような交通情勢の下で設立され、交通事故防止と交通事故時の被害軽減を目的として、「人」「道」「車」という三要素から交通事故に関する総合的・科学的な調査研究を行い、官民それぞれの立場から行う各種交通安全対策の立案・実現に寄与してまいりました。

この間、1992年には11,452人あった交通事故による死者数は、2017年には昭和23年以降、警察庁が統計を取り始めて最少の3,694人にまで減少しました。このことは官民挙げて交通安全に取り組んできた成果であり、当センターもその一端を担ってきたと自負しております。

1. 事業内容

当センターは、1992年6月に国家公安委員会より道路交通法第6章の3に規定される「交通事故調査分析センター」の指定を受け、これにより警察庁等から交通事故データ、運転者管理データ等を、また、国交省からは自動車登録データや道路交通センサスデータ、日本自動車工業会からは自動車安全デバイスデータの提供を受け、各種交通事故統合データベース(マクロ)を構築しています。

さらに、「事故現場に原因究明の鍵がある」ことからマクロデータに加えて、1993年に茨城県つくば市につくば調査事務所を設立、交通事故事例調査を実施しています。調査員は、交通事故当事者の心理等の人的側面、道路交通環境、車両、救急・救助、医療等の観点から交通事故の情報を合理的かつ科学的に調査して関連データを収集し、データベース(ミクロ)化しています。さらには特定の事故類型、事故状況等について、原因等の分析研究に資することを目的とする交通事故例調査を行う東京調査事務所も2016年に設けました。

これらの事故データを活用し、イタルダでは各研究員が、①それぞれ独自の課題を設定して、各種交通安全に資するためのデータ収集や交通事故分析手法についての自主研究、②センターの保有する「交通事故統合データベース」と「交通事故例調査データベース」の各種データと外部の研究機関、団体の有する専門知識との相乗効果が期待できる課題についての共同研究、③国、地方公共団体、大学、民間等から、交通事故の分析研究業務を受託して、委託者である国、地方公共団体、民間が行う交通安全対策の高度化、効率化を支援する受託研究、④様々な分野の研究者を客員研究員として招き、センターの保有する各種データを、客員研究員独自の視点で調査分析する客員研究員による研究を行っています。これらマクロデータとミクロデータを有機的に結合して、交通事故防止と交通事故による被害の軽減に資する調査分析研究を実施できるのが当センターの強みです。

これらの交通事故統合データから作成された統計表データや交通事故調査事例の一部は広く交通安全対策や啓発活動のために書籍、ホームページ

▶ 公益財団法人 交通事故総合分析センター ◀

等で公開しています。

また、当センター研究員による研究成果の一部は、毎年当センター主催の「交通事故・調査分析研究発表会」で報告されます。その他にも交通事故の調査・分析結果を分かりやすく解説した「イタルダ・インフォメーション」としてまとめ、冊子やホームページ上に公開しています。

2. 組織体制

イタルダの所在地は本部、東京調査事務所、つくば調査事務所の3か所で、職員は全体で70名ほどの所帯です。組織としては理事会のもとで、ミクロ調査を行う調査部、様々な研究を行う研究部、データベース構築・データ集計や研究成果の情報発信などを行う業務部、総務・会計の総務部の4部傘下の7課2調査事務所、主任研究員、客員研究員で構成されています。職員の出身母体は行政機関、自動車メーカー、大学研究機関など様々で、各人の持ち味を生かしながら仕事を行っています。

3. 研究Topics

私の所属する研究部研究第一課では、主に交通事故の「人」要因から、さまざまな交通参加者を対象とした安全管理・安全教育の立案に寄与する研究に取り組んでいます。

効果的な安全管理・安全教育を展開していくには、交通参加者の集団の特徴を把握し、その特徴に応じて対策の内容を吟味検討、立案することが不可欠です。昨今、自動運転技術が進み、また免許人口の高齢化や交通参加者の多様な生活様式など、交通参加者を取り巻く環境は複雑化・多様化しており、交通参加者の特徴把握の重要性は増しています。

多様な運転者属性に応じた安全管理・教育内容の検討に資する研究の一つに、「運転者管理データ」の中の“検挙違反者の累犯データ”に着目した研究があります。たった1度の検挙違反には偶然性が考えられますが、同一の違反内容で複数回検挙された累犯者のデータには、運転者の普段の

運転行動の“クセ”が反映されているとも考えられます。そこで、検挙違反者の累犯データを分析し、高齢運転者や職業運転者など、多様な運転者集団の不安定な行動傾向性の把握を試みています。

また、地域レベルでの効果的な交通安全教育の検討を目的として、「交通事故データ」による地域の事故実態と、質問紙調査により収集した地域住民の交通安全意識とのズレから、地域住民のリスク認知特性を把握する分析も手掛けてまいりました。

さらにイタルダでは、2018年から、高齢運転者が運転免許更新時等に受検する“認知機能検査データ”の分析が可能となりました。この認知機能検査データを含む「運転者管理データ」と「交通事故データ」を統合した「免許・違反事故履歴統合データベース」を用いて、社会的なトピックである高齢運転者の事故防止の推進を目指し、高齢運転者の認知機能と交通事故のコホート研究もはじめたところです。

このようにイタルダは、大規模な人身事故データを中心とした、唯一無二の各種交通事故統合データベースや、独自の調査による交通事故例データを保有しています。そうした強みを活かし、今後も多様化する交通参加者の属性に応じた分析、研究を行い、効果的な事故防止対策に寄与するエビデンスを収集・蓄積そして発信してまいりたいと思います。(了)

小菅 英恵 (こすげ・はなえ) / (公益財団法人交通事故総合分析センター研究員)

立正大学応用心理学コース修士課程修了。現在、筑波大学博士後期課程に在籍し、発達障害者、高齢者の注意機能と交通場面のエラーを研究する傍ら、大規模な事故データを用いた交通参加者の心理・行動特性の分析や、安全管理のためのデータ活用研究等に従事。ヒューマンエラーの発達の特性や日常場面の安全適応に興味を持つ。

北海道胆振東部地震 支援の心をつなぐことの難しさ

山本 勝則

(天使大学)



2018年9月6日03時07分、最大震度7の「北海道胆振東部地震」が発生した。この地震が発生した時、私は札幌市中央区のマンションの7階で寝ていた。強い揺れを感じたが、ものが落ちたり家具が倒れたりすることはなかった。なるようにしかならないだろうとそのまま寝ていた。停電したが、幸いなことに水やガスは大丈夫であった。翌朝、全ての公共交通機関が停止し、道路も停電により信号機が消えたため、自動車はノロノロ進んでいた。コンビニはほとんど閉じていた。しかし、地元の業者が経営するコンビニは開店していて、客は長蛇の列になっていた*。かなりの影響を受けたものの、自分自身については心理的ストレスも、生活上の困難も大したことはなかった。

ところが、周りの被害は大きかった。同じ札幌市内でも、清田区は大規模な道路の陥没や家屋の倒壊が発生した。震源地の胆振東部の厚真、安平、むかわの3町は、震度7のところもあり、仮設住宅が必要になった。そのため被害の少ない自分としては、被災地に何か支援をしたいと思うのだが、何をしたらよいのかわからなかった。震源に近い千歳市周辺の知り合いや、学生の安否確認はした。直後の対策についても、少しやり取りした。その程度である。遠方の知り合いからはたくさん連絡をいただいたのに、私は、より震源に近い人たちに対してほとんど貢献できなかった。

振り返ってみると、2011年の東日本大震災の時も手も足も出なかった。現地に行ったとしても移動手段すらないことを考えると、動きが取れなかった。DMATとして現地に行ってきた人たちの振り返りに参加しただけだった。2016年の熊本地震の時は、被害状況や資源に関する情報が、意

外にも現地の人には伝わりにくいことがわかっていった。そこで、繰り返し情報を提供し、しばらくして現地にも赴いた。しかし、これらの行動は、支援と言えるほどのものではなかった。

震災に限らず、支援してほしい人と支援したいと思っている人との「支援の心をつなぐ」のは、重要だが難しい。大学でも、困難を抱えた学生と学生相談室とがなかなかつながらない。職場や日常生活でも、支援を必要としている人と支援できる人をいかにつなぐかがしばしば課題になる。色々考えるのだが、どの分野でも簡単には解決策が見つからずにいる。

*その業者は震災に備えて、自動車の電力をコンビニの営業に使えるよう準備していたそうである。

山本 勝則(やまもと・かつのり) / 1951年 秋田県生まれ
秋田大学医学部附属看護学校卒業 秋田大学教育学研究科修士
課程修了
(現職) 天使大学特任教授
看護師 応用心理士 日本応用心理学会理事。

イングランドの学校選択制

川地 亜弥子

(神戸大学大学院)



2017年に9か月、イングランドのケンブリッジで在外研究をしました。幼児教育から中等教育までのべ20校で学校見学をしました。どの学校も子どものために…と努力していましたが、「これは日本の教育制度と根本的に違って大変（まねしない方がいい）」と思うところが一つありました。それは学校選択制です。

イングランドは9月が新年度です。9月1日に3歳の子を持つ保護者にとって、9月からの3か月はとても重要な時期です。なぜなら、我が子をどの学校に通わせたいか決め、申し込む必要があるからです。熱心な人はこの時期（もしくは子どもがもっと低年齢の時）に学校訪問をします。

なぜこんなに早いかというと、一定の学区の中の学校であればどこでも行けるという建前（学校選択制）なので、しっかり情報を集めて、遅れずにエントリーしないと、希望する学校に行けない可能性が高いからです。多くの子どもが義務教育開始の小学1年（5歳、日本だと年長さん）からではなく、その1年前のレセプションクラス（4歳）から通います。レセプションクラスは義務教育ではありませんがかなりの子どもが通っています。レセプションクラスに入る前年度の1月中旬が事実上の申し込み締め切りなのです。

締め切りまでに役所のウェブサイトで希望の学校を3つまでエントリーすると、5月ごろに「〇〇校に入学です」と連絡が来ます。4歳になった我が子が9月に入学（入園？）となります。

この波に「乗れた」人はよいのですが、遅れると…ケンブリッジではとても大変です！ 受付のウェブサイトに、「学校申し込みは締切日の午後11:59まで」とはっきり書いてあります。たい

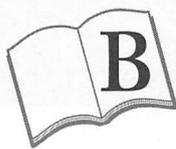
しよっちゅうシステムダウンするのに…。その後は紙の書類で受け付けるそうですが、その場合、「学校が新年度開始ぎりぎりまで決まらなかった」という人もいます！ いわゆる「人気のある学校」に入れないことはもちろん、そうでない学校でもすぐには決まらないのです（就学年齢のお子さんを連れて在外研究を予定している人は、できるだけ早く役所のウェブサイトを見た方がいいです）。

ロンドンや、マンチェスターなどの大都会も同様で、引っ越しなどの事情を学校に直訴しても「申し込んでない人は入れない」と言われ、役所に申し込んでもなかなか決まりません。日本のように、引っ越してきた子にも、できるだけ早く学校教育を保障する、というシステムではないのです。

イングランドの学校はOfstedという機関が行う学校評価をととても気にしており（この結果を見て親が学校を決めるのです）、そこに子どもの成績や出席率なども関係してくるため、引っ越してきた子どもの受け入れに慎重なのでは、という人もいます。ぜひ実態を知りたいところ。

さて、こんなに大変な学校を選びますが、なんと多くの学校ではオープンスクール（学校公開）をしていません。公開日を「学校だより」などに掲載する学校もありますが、この方法では学校関係者の知り合いしか分かりません…。基本的には、学校に直接お願いして見学させてもらうしかないので、申し込みの締め切りが近くて学校に理解されやすいこの時期に保護者が動き出すのです。

川地 亜弥子（かわじ・あやこ）／福井県生まれ。自己表現としての作文教育の研究を行っている。神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。共著に『戦後日本教育方法論史』（ミネルヴァ書房）、『グローバル化時代の教育評価改革』（日本標準）。



セックス／ジェンダー — 性分化をとらえ直す —

アン・ファウスト・スターリング 著

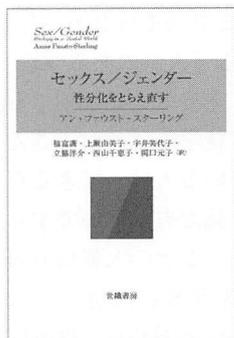
〈訳〉

上瀬由美子・福富護・
宇井美代子・立脇洋介・
西山千恵子・関口元子

2018年8月30日発行

世織書房

2,200円(税別)



本書は生物学者が書いた、セックス/ジェンダー/セクシュアリティに関する入門書である。男と女がいかに違うかを確認しようとしてこの本を手にとった読者は、読み進めるうちにきっと頭の中が混乱してくることだろう。積み重ねられた多様な研究が、生物学的視点から見ると男・女という区別そのものが実は“曖昧”であることを示しているからだ。著者は「人間を男と女で二分する」という考え方そのものに疑問を投げかけている。同性愛/異性愛についても著者は過去の研究を精査し、性的指向について、現在まで生物学的な根拠を示したものはないと結論づけている。振り返ってみると、古い時代の心理学は性別や性的指向に関する偏見や差別の助長に加担してきた過去がある。人をカテゴリー化して分析することを日常とする心理学者は、自らが立っている「男・女」「同性愛・異性愛」という二分法の足場自体が、いかに危うく不安定なものか知っておく必要がある。



上瀬 由美子(かみせ・ゆみこ) / 日本女子大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。博士(文学)。現在、立正大学心理学部教授。著書に「ステレオタイプの社会心理学」(2002)サイエンス社、など。

改訂 ヒューマンエラーの心理学入門

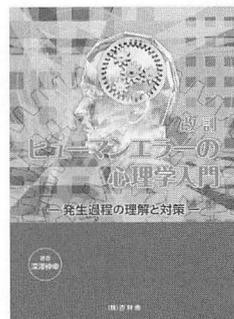
— 発生過程の理解と対策 —

深澤 伸幸 著

2018年3月15日発行

(株)杏林舎

2,200円(税別)



本著は、心理学に関心を寄せる学生や一般の読者が気軽に読めるテキスト、書籍を目指したものです。本文では、従来の書籍にありがちな理論の概説から入るのではなく、ヒューマンエラーに関する実際の事例を述べた後、その事例を理解するために必要な用語と解説を記載する形式を取っています。本文は13章と4つの参考資料から構成され、ヒューマンエラーに関する基本的な考え方から、エラー行動を理解するために必要となる心理学の基礎知識、加えてエラー行動の再発防止策までを網羅しています。改訂版では、認知心理学の視点に加え、動機づけやパーソナリティも加味し、一般読者や学生諸子が楽しく心理学の基礎を学べるように編纂してあります。

深澤 伸幸(ふかざわ・のぶゆき) / 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士 / 博士(心理学) 現在、松蔭大学コミュニケーション文化学部生活心理学科教授 / 著書は「リスク・パーセプションと人間行動」(2005)高文堂出版、中央労働災害防止協会月刊誌「安全衛生のひろば」にて2019年度連載中、など。

Recommended

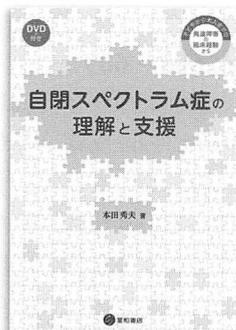
天使大学
山本 勝則

自閉スペクトラム症の理解と支援

—子どもから大人までの発達障害の臨床経験から—

本田 秀夫 著

2017年12月25日発行
星和書店
1,800円(税別)



この本には、明快な論理とともに、印象的な具体例による説明があります。論理面では、健常者を多数派、自閉スペクトラム症者を(障害者ではなく)少数派と考えて、少数派をインクルージョンするという視点での支援を提案しています。つまり、障害という見方よりも、多くの人の世界観と異なる独特の考え方・感じ方をする世界観を持つ人たちと見做して社会に受け入れるという考え方です。

具体例は、一人で遊んでいるA君に、B君が「ねえ、一人なの?」と声をかけた場面です。A君が何も答えなかったためにB君は行ってしまいました。そして、A君は5分後にB君のところへ行って「うちは4人家族だよ」と言いました。5分間真剣に質問の意味を考えた後の答えです。特有のこだわりについては、目に触れなければこだわらないので隠してしまうという、とても実践的な示唆もしています。論理、実践両面で、随所に目からうろこの記述を楽しむことができます。



山本 勝則(やまもと・かつのり) / 1951年秋田県生まれ 秋田大学医学部附属看護学校卒業 秋田大学教育学研究科修士課程修了(現職) 天使大学特任教授
看護師 応用心理士 日本応用心理学会理事。

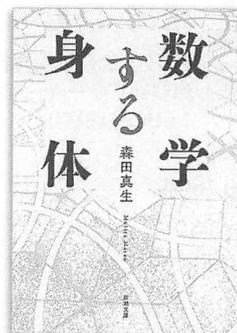
Recommended

立正大学大学院
小橋 眞理子

数学する身体

森田 真生 著

2015年10月19日発行
新潮社
1,600円(税別)



小林秀雄賞をとった数学の本である。数学と言われてもピンと来ない人もいるかもしれない。しかし手に取ってほしい。読むにあたって難しい数学の知識はいらない。ここには著者の数学への情熱が詰まっている。数学と人とのかわりが様々な角度から述べられ、読み進むうちに自ずとその世界に魅了されていく。そのなんと広大で奥深いことか。

著者が敬愛する岡潔は、情緒を中心とする数学を理想としたという。数学への無機質な印象が一変する。人の数把握に関する脳科学的研究の紹介も興味深い。人にとって数学は成るべくして成ったのかと思わせる。

心理学に携わる者としては、ときに「数学」を「心理学」と脳内変換しつつ文字を追う。「不思議で不思議で仕方ない。この痛切な思いこそが、あらゆる学問の中心にあるはずである」と著者は言う。数学を基にしながら生きることへの神秘を追求しようとする、著者のまっすぐな思いが伝わってくる。ぜひ、この数学的風景の中に身をゆだねてみてほしい。



小橋 眞理子(こばし・まりこ) / 社会人で学部から大学院へという遅い出発ながらも、2017年に立正大学大学院心理学研究科博士後期課程修了。現在も同大学院にて研究継続中。東京未来大学・聖学院大学・茅ヶ崎看護専門学校にて非常勤講師勤務。研究テーマは衝動性。

Recommended

広報委員

佐々木 美智子

『自閉症の世界 — 多様性に満ちた内面の真実』

ステイブ・シルバーマン 著

正高 信男・入口 真夕子 訳

2017年5月17日発行

講談社ブルーバックス

1,600円(税別)



抜き書き

p. 604

脳多様性の提唱者たちは、社会が自閉症を自然世界のミスとみなすのではなく、人類の遺伝的遺産の重要な一部としてとらえるべきであると提案している。自閉症の原因を突き止めるために年間何百ドルも投資するのではなく、自閉症者やその家族の生活が、もっと幸せで健康で充実した不安のないものにするための支援に予算を向けるべきだと主張している。こうした取り組みは、やっとはじまったばかりである。

p. 605

脳多様性の発想を理解するには、ディスレクシアやADHDというようにさまざまな診断名をつけるかわりに、個々の人間をひとつのオペレーティング・システム (operating system) とみなしてみるといいかもしれない。脳はなによりも驚くほどの適応性のある器官であり、ひるむような限界に直面したときでも、成功の可能性を最大限に高めることに長けている。

p. 606

近年になって、自閉者の自立支援運動の提唱者、障害児の親、教育者のあいだで脳多様性 (ニューロダイバーシティ) という概念は急速に受容されつつあり、多様なオペレーティング・システム (すなわち多様な障害者) と協力することを目的とする、開かれた世界の基礎となり得る数多くのイノベーションを提案している。

p. 608 - 609

個別支援教育 (Individualized Education Program) の達成は子どもの弱点に対処することだけに専念したもので、うまくいけば教師がその子の関心を引き付け、その子に自信をもたせることができるような長所に目を向けることをなおざりにしている点についてもアームストロングはくりかえし指摘している。(中略)

脳多様性運動の活動家たちもまた、「わたしたち抜きにわたしたちのことを決めないで (Nothing about us, without us)」というスローガンをもって、政策決定の場に、自閉症者の代表を参加させるように要求する運動を展開している。(中略)

世の中にはさまざまなタイプの頭脳があり、それら一つ一つのタイプのニーズや特別な才能に応じて、それにふさわしい世界を築いていくという試みはまだはじまったばかりである。

生まれ出る命は、その尊厳においてすべて平等であり、人類の歴史に新しい価値を刻むものであることを、本書もまた私たちに知らしめてくれます。



佐々木 美智子 (ささき・みちこ) / 鹿児島県内の志学館大学・龍桜高等学校看護学科専門課程非常勤講師。フリーの発達相談員。妊娠期・乳幼児期・学齢期・青年成人期・高齢期・終末期と様々なライフステージの相談活動に従事。恩師 (故田中昌人氏) には「学問が生活の顔をつけて歩いている」「もっと学問をしてください」と言われた。「学」が何たるやを問い続けて40数年。介護別居が結婚生活の半分を経て、双方の両親看取り後の同居。2子は独立。要介護犬1匹。

第29回国際応用心理学会報告

蓮花 一己
(帝塚山大学)



1. 理事会の位置づけ

本報告では、2018年6月25日から30日にかけて、カナダモントリオール市国際会議場 (the Palais de congrès de Montréal) において開催された第29回国際応用心理学会及びその理事会について報告する。当学会は4年に一度開催される応用心理学のすべての分野を対象とした国際会議であり、世界中から多くの専門家が参加する。

学会に先立ち、6月24日午前9時から午後5時まで及び、25日午前9時から午後4時までに理事会 (IAAP Board of Directors Meeting) が開催された (図1)。その構成メンバーは常任理事会 (IAAP Executive Committee) のメンバーとIAAPに存在する18の部会 (Division) の部会長 (Division President) 及び次期部会長 (Division President-elect) である。ちなみに、IAAPとICPの両方の学会の際に、双方の学会の理事会が定期的に行われている。筆者は第13部会 (Division of Traffic Psychology) の次期部会長という立場であった。

本学会中までが現部会長が務め、学会終了とともに、次期部会長が正式に部会長となる。IAAPでは常任理事会も部会も、前会長、現会長、次期会長の3者が合議で運営を進めるという方式を採用している。参考までに、第13部会では、北米、ヨー

ロッパ、アジア・オセアニアという3ブロックで部会長を順番に交代させることで、国際的な交流推進とネットワーク拡大を図っている。

2. 理事会の審議

事前にメールで配布された理事会の資料は膨大なもので、紙ベースで打ち出すと高さ数センチになるので、理事会での審議では、皆コンピュータで資料を見ながらの審議となっていた。主な内容は、1)学会活動報告、2)委員会報告、3)特別委員会報告、4)特命委員会 (Task Force) 報告、5)各部会報告、6)他学会との連携報告、7)諸学会報告、8)学会賞及び名誉会員等報告、9)役員選挙及び承認、10)活動方針 (次期会長) 等であった。いずれも議事進行規則に則って、厳密に進められた。決定された事柄はIAAPのHPで順次掲載される予定である。学会終了後には、IAAPの会長は現在のJanel Gauthier氏から次のChristine Roland-Levy氏に交代した。

24日の夜には、理事会メンバーの夕食会が開催された (図2)。いつも感じることだが、こうした理事会メンバーは公私ともに長い付き合いを通じて、お互いをよく理解して、ボランティアとして学会運営に参加している。私を含めて、日本人は学会発表を行った後に、すぐに帰国するか、周囲



▲ 図1 IAAP理事会での審議の様子

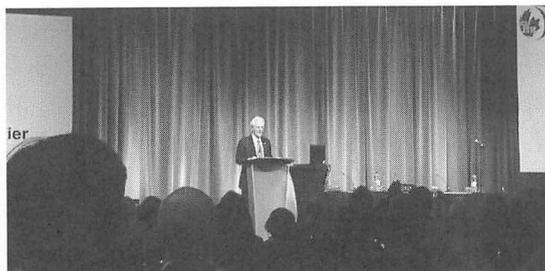


▲ 図2 理事会の夕食会

を観光して帰国するという人が多いと感じている。学生のうちから学会ボランティアに参加することや、部会の活動でシンポジウムを企画するなど、運営面でも国際学会に積極的に参加して大会を盛り上げて欲しい。

3. 学会の概略

学会の様子は他の参加者の報告でも取り上げられると思うので簡潔に行う。6月25日のWelcome Receptionに続いて、26日午前に関会式が行われた(図3)。その後symposiumやkeynote address, oral presentation, poster presentationがいくつかの会場に分かれて進行した(図4、図5)。Keynote addressやoral presentation発表では、事前にパワーポイント資料を登録して、画面のスケジュール上の発表をクリックすると資料が提示



▲図3 Janel Gauthier会長による挨拶



▲図4 Keynote addressの様子



▲図5 展示コーナーとポスター発表会場
(奥の方がポスター会場)

されるという方式であった。

ポスター会場と展示コーナーは同じ大会場で実施されていた。北米で多い横長の大きなボードに大きなポスターを張り付けるスタイルであった。また、ポスター会場の一部では、Gimm5という5分間の口頭発表がなされていた。これは新しい取組であろう。

28日にはCongress dinnerがモンリオール市の有名なホールで催され、多くの会員が参加した。ちょうどモンリオールでは同時期にジャズフェスティバルが行われていることもあり、ジャズナンバーが演奏されていた。



▲図6 Congress dinnerの様子

4. 今後のIAAP

今回のICAP2022は2022年7月24日から29日にかけて、中国心理学会が主催者となり、中国北京市において催される。Kan Zhang教授が大会委員長となり、実行委員会では、18の部会ごとに責任者を定めて準備を進めている。その具体的内容は、順次HPで掲載されるであろうが、アジアでの開催であるだけに、日本の心理学研究者も積極的に参加し、大会を盛り上げる必要がある。

※ICAP2018大会への参加にあたっては、日本心理学会の助成を受けた。本稿はその報告書をもとにしたものである。

蓮花 一己(れんげ・かずみ) / 帝塚山大学心理学部教授、学長1954年、京都府生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。帝塚山大学心理学部教授。2017年4月より帝塚山大学学長。専門は交通心理学。ドライバー行動や事故多発地点の分析、子どもや高齢ドライバーへの教育手法の開発研究を行う。(公社)全日本指定自動車教習所協会連合会・理事、内閣府第10次交通安全基本計画専門委員などを歴任。

新体制のスタートにあたって

日本応用心理学会 理事長 藤田 圭一

日本応用心理学会（以下、本学会）は、2018（平成30）年4月1日より、6期目の役員体制になりました。歴史を振り返ると、本学会は伝統的に運営委員による委員会制度のもとで活動してきました。常任運営委員（運営委員の互選）は現在の常任理事に相当しますが、本学会の各種役職を担うことで、今日の本学会の発展に結びついたものと確信しています。

本学会の歴代会長は、次期大会の準備委員長が兼務（すなわち大会終了日までの1年間の輪番制）でしたので、実質的には事務局長担当の常任運営委員と事務局幹事が、手作りで本学会を切り盛りしていたと言ってもよいでしょう。それゆえに、アットホームな雰囲気の中、学会運営と実践・研究活動が繰り返し広げられ、これは現在でも脈々と続いています。

今から15年前（2003年4月1日）、選挙を導入することによる理事会制度が発足し、第1回選挙がおこなわれました。会長を理事長に職名変更し、任期を3年（再任可）として新たな会則のもとでスタートしましたが、本学会の理念や学術的な評価は何ら変わるものではありません。以後、理事・監事選挙、常任理事選挙、理事長選挙が滞りなく進められ、本学会と応用心理学を支えてくださる会員が集結しています。筆者は、理事長として6期目も担当するよう会員の皆様から負託されました。2020年度末まで本学会の発展のために邁進いたしますので、どうぞよろしくごお願い申し上げます。

会員の諸先生・皆様には、今後の本学会のあり方につきまして、どのようなことでも構いませんので、さまざまなご提言をお寄せくださいますよう、心よりごお願い申し上げます。



藤田 圭一（ふじた・しゅいち）／日本体育大学教授。日本応用心理学会理事長。専門は教育心理学・教育臨床心理学。一般社団法人日本心理学諸学会連合心理学検定局長。第80回記念大会委員長。応用心理士、臨床心理士。

第29回（2018年6月）国際応用心理学会 モントリオール大会参加者の皆様

角山 剛 国際交流委員会 委員長

国際交流委員会では、第29回国際応用心理学会モントリオール大会（ICAP2018）における本学会会員による研究発表を対象に、機関誌『応用心理学研究』の英文特集号を編集いたします。

つきましては、第29回国際応用心理学会大会一般参加者の英文論文を下記の要領で募集いたしますので、ふるってご投稿ください。

論文募集・執筆要領

(1) 投稿資格は、本学会の会員であり、かつ第29回国際応用心理学会で研究発表した方です。また当該投稿論文の連名者は、第29回国際応用心理学会大会での連名発表者に限るとともに、本学会会員であることを要します。なお、本学会会員であっても会費未納者の場合には投稿は受理されません。

本学会に平成31年（2019年）3月1日（消印有効）までに入会申請を行い、常任理事会で入会が認

められた方が対象となり、上記投稿資格ならびに連盟発表者の資格を有するものとします。

- (2) 投稿論文は、未公開のもので、電子媒体（word、一太郎）による執筆・投稿とします。
- (3) 投稿を希望する方は、日本応用心理学会ウェブサイト上の電子投稿システムを用いて投稿してください。電子投稿システムにてご投稿いただく際、【論文の種類】で「その他」の下に
 - ・国際応心英文特集号：原著
 - ・国際応心英文特集号：資料以上の2択がありますので、どちらかを選んでいただければ、特集号の投稿として受付が可能になっています。「機関誌投稿規程」以外に、「電子投稿システム・汎用マニュアル（投稿者用）」に従ってください。
- (4) 論文は英文で、「原著」か「資料」に限り受け付けます。枚数は5～8ページ以内とします。短報については、以前の英文査読において著しい困難が認められたため、投稿を認めないこととしました。
- (5) 原稿の執筆形式・要領は『応用心理学研究』の投稿規定に従ってください。なお、英文要約は、100～175語とし、別紙で論文の概要を示す和文要約（目的、方法、結果、考察に分け、800～1000字程度）を付してください。
- (6) 論文投稿前に、英文について、必ずネイティブ・チェックを受けてください。この場合、専門業者である必要はありません。
- (7) 投稿論文は、英文特集号編集委員会（国際交流委員会）の依頼した査読者（複数）による審査があります。採択にならない場合や修正を求められる場合がありますので、あらかじめご承知おきください。
- (8) 採択可となった論文については、原則として、英文特集号編集委員会で専門業者によるネイティブ・チェックを依頼します。このチェックに関する費用は、執筆者に負担していただきます。
- (9) 投稿論文の締め切りは平成31年（2019年）6月30日（消印有効）とします。これ以降は電子投稿システム上での投稿はできなくなりますので、ご注意下さい。

英文特集号への投稿に関する質問は下記の問い合わせ先にメールにてお願いします。

問い合わせ先

国際交流委員会委員長 角山剛 ([kakuyama-takashi\(at\)tokyomirai.jp](mailto:kakuyama-takashi(at)tokyomirai.jp))

※ (at) をアットマークに換えてご連絡ください

3

齋藤勇記念出版賞のご案内

外島 裕 齋藤勇記念出版賞選考委員会 委員長

齋藤勇記念出版賞へのご推薦をお願いいたします。本出版賞をご案内いたします。

本学会名誉会員である齋藤勇先生の趣旨および基金により平成27年4月1日より施行されている出版賞です。本学会の会員により、応用心理学や心理学のテーマを、心理学を専門としない一般の方々にもわかりやすく書かれた書籍とその著者を表彰することを目的としています。

話題性のあるソフトな内容の書籍に光を当てようとする趣旨により、たとえば「新書」「文庫」「叢書」「啓蒙書」等を対象としています。重厚な専門書、翻訳書、あるいは教科書などは想定されていません。

出版賞の対象書籍は、本学会員による推薦（他薦・自薦）により、選考委員会で検討され、常任理事会で決定されます。出版された当該年度（4月1日から3月31日）の書籍について、原則単著、当該年度内に1冊としています。出版された次の年度の年次大会の総会において、賞が授与されます。副賞として、基金より3万円が贈られます。

受賞した書籍をご紹介します。

平成27年度は、坂井信之著（2016）『香りや見た目で脳を勘違いさせる 毎日が楽しくなる応用心理学』かんき出版。

平成28年度は、岩崎久志著（2017）『ストレスとともに働く 一事例から考えるこころの健康づくり―』見洋書房。

そして、平成29年度は、誠に残念ながら、会員諸氏からのご推薦はありませんでした。

応用心理学等を広くまた興味深く多くの方々に理解していただき、人間理解や社会貢献に資するために、会員皆様のご著書の執筆とともに、ご推薦をお願いいたします。

4

機関誌編集委員会

軽部 幸浩

今年4月より新理事体制の下、機関誌編集委員会が構成されました。また、折しも学会事務委託業の移管、機関誌印刷所の変更も重なり、当初予定していた論文投稿システムの稼働が7月までずれ込み、論文の投稿開始を心待ちにしておられた会員の方々には、ご迷惑をおかけしました。論文投稿システムの稼働翌日には、さっそく論文の投稿がありました。現在までの投稿論文数は10数本を数え、論文の審査が順調におこなわれております。機関誌第44巻1号は、発行が若干遅れましたが、第44巻2号は11月下旬に予定通り発行できました。

今後の課題としては、日本応用心理学会も時代の流れに乗って、紙媒体が主であった「応用心理学研究」も電子化公開を少しずつおこなうよう作業を進めてまいります。そのことに付随し、種々の規程改訂が出来てきました。できるだけ会員の皆様の不利にならぬように改訂作業を進めてまいりますので、よろしくご理解くださいますようお願い申し上げます。

末尾となりましたが、今期の機関誌編集委員会委員は、投稿論文の速達化を図るために、前期までの約倍の人員を配して論文の投稿をお待ちしています。また、機関誌編集委員会委員につきましては、機関誌並びに学会ホームページをご参照ください。

5

広報委員会

田中 真介

今期の広報委員会は、次の5名で担当します。田中真介（委員長、京都大学）、佐々木美智子（副委員長、鹿児島・志学館大学）、来田宣幸（第11号編集長、京都工芸繊維大学）、川地亜弥子（第12号編集長、神戸大学）、張貞京（第13号編集長、京都文教短期大学）。

広報委員会のおもな任務は『応用心理学のクロスロード』の編集です。また、学会事務局や機関誌編集委員会などの各委員会と連携し、学会内外の情報を収集して、会員の方々の研究活動を後方からサポートする活動を行っています。

今期の3年間は、上記のように若手の委員が各号の「編集長」の役割を担って、思い切った斬新なアイ

デアを随所に自由に盛り込んでいけるようにしました。会員の皆様から、クロスロードの内容や構成について、新たなアイデアやご提案をいただければと期待しています。

『応用心理学のクロスロード』次号(第12号、2020年3月発刊予定)では、次のようなコーナーを準備して、皆様の投稿をお待ちしています。

●募集コーナー

- ①「**ホープ登場 クロスロードの星**」：大学院生、若手研究者(800～1000字)
- ②「**大学探訪 研究室におじゃましました**」(800～2000字)
- ③「**職場探訪**」(800～2000字)
- ④「**CROSSROAD ESSAY**」(3000字)
- ⑤「**海外最新事情**」(800～1000字)
- ⑥「**心理学から見たおすすめDVD紹介(映画紹介)**」(800～1000字)

*原稿字数には「図表」のスペースを含みます。

- ⑦「**BOOK REVIEW 本を出しました**」：これまでに刊行された書籍の紹介(400字)
- ⑧「**BOOK REVIEW おすすめの1冊**」：会員に一読を勧めたい書籍の紹介(400字)
- ⑨「**応用心理士の現場**」(800～1000字)
- ⑩「**その他**」：本誌への感想・意見、学会へのメッセージなど、自由にご投稿ください。

●原稿締め切り：(2019年度、第12号) 2019年9月30日(月)

(13号以降に掲載させていただく場合もあります)

●応募方法

原稿には、連絡先(住所、電話、メールアドレス、所属)を明記して、メール添付ファイルでお送りください。件名には「応用心理学のクロスロード、原稿応募」とお書きください。送り先は、学会ホームページにてご案内いたします。

6

企画委員会

白井 伸之介

2018年度企画委員会は白井伸之介(委員長、大阪大学)、いとうたけひこ(和光大学)、桐生正幸(東洋大学)、篠原 一光(大阪大学)、谷口淳一(帝塚山大学)、中井宏(大阪大学)の6名で構成されることになりました。よろしくお願ひ致します。委員会では本年度の活動として、以下を実施しました。

1. 2018年度学会研修会(於 第85回大会)

(1) 研修会A(8月25日)

講師：松浦 常夫氏(実践女子大学 人間社会学部)

演題：人に着目した応用心理学：交通心理学の場合

(2) 研修会B(8月26日)

講師：平井 啓氏(大阪大学大学院 人間科学研究科)

演題：公認心理師と心理コンサルテーション・心の健康教育の理論と実践

2. 2018年度企画委員会公開シンポジウム

テーマ：「自動運転が社会的に受け入れられるために」

日 時：2018年12月15日（土） 13時30分～16時

会 場：立正大学品川キャンパス（品川区大崎4-2-16）

企 画：日本応用心理学会企画委員会、篠原 一光（大阪大学大学院人間科学研究科）

（趣旨）自動車の運転支援・自動運転の技術開発が急速に進みつつある。世界中で自動運転に関する様々な試みが行われ、人間が自ら自動車を運転することがない未来がすぐ近くまで来ているように感じられる。しかし自動運転にはまだ多くの解決すべき問題が残されており、その中の一つが自動運転に対する社会的受容である。新しい技術は、それを利用する人間が技術を理解・信頼し、「使ってもよい」「使いたい」と思って初めて受け入れられるが、これらはまさに使う側の心理の問題である。本シンポジウムでは自動運転を社会が受容するために、技術開発側とユーザ側の双方に何が必要となるのかを考えたい。

話題提供者

赤松 幹之氏（産業技術総合研究所）：ヒューマンファクターから見た自動運転技術の現状

三輪 和久氏（名古屋大学情報文化学部）：自動システムに対する信頼と過信

小木津 武樹氏（群馬大学理工学部）：自動運転の社会実験から見えてくるもの

八木 絵香氏（大阪大学COデザインセンター）：技術の社会的受容

指定討論者

芳賀 繁氏（社会安全研究所）

共 催 日本認知心理学会 安全心理学研究部会



白井 伸之介（うすい・しんのすけ）／1956年 兵庫県生まれ。大阪大学人間科学部卒業、大阪大学大学院博士後期課程単位取得退学。大阪大学人間科学部助手、労働省産業安全研究所研究員、大阪大学人間科学部助教授を経て、2003年4月より同教授。博士（人間科学）。専門は産業心理学、安全行動学。日本応用心理学会常任理事、日本心理学会理事、産業・組織心理学会理事など。

7

学会賞選考委員会

学会賞選考委員会 委員長 木村 友昭

日本応用心理学会では、毎年、学会賞と優秀大会発表賞を授与しています。これらの賞がどのように選ばれるかを説明させていただきます。

まず、学会賞ですが、前年度の機関誌「応用心理学研究」に掲載された論文から選考されます。学会賞には、論文賞と奨励賞があります。論文賞は、原著論文と総説論文の中から選ばれます。一方、奨励賞は、それ以外の論文、つまり資料、短報、実践報告などから選ばれます。選考の手順ですが、学会の理事・監事がこの対象論文の中から推薦し、それに基づいて学会賞選考委員会が選考を行い、さらに常任理事会で審議・決定します。多くの人が関わっているので、厳正公平な選考となります。

つぎに、優秀大会発表賞ですが、大会に参加された会員の皆さんにはなじみ深いものと思われま。2017年の第84回大会は、ポスター発表の中から6つの部門ごとに選ばれました。2018年の第85回大会は、口頭発表とポスター発表がありましたので、それぞれから選ばれることになります。学会賞は理事・監事の推薦がベースになりますが、優秀大会発表賞は会員の皆さんが投票することができます。もちろん、応用心理学会の会員であっても、大会に参加しなければ投票できません（当然ですが）。なお、大会参加者は、自分の発表には投票できません。選挙ではなく表彰ですから、自薦はなく他薦のみです。大会参加者の投

票結果に基づいて学会賞選考委員会が選考を行い、さらに常任理事会で審議・決定します。優秀大会発表賞は、過去5年間に受賞した人は選考されませんので、多くの人にチャンスがあります。来年度(2019年)の第86回大会でも優秀大会発表賞を選考しますので、参加される方は、ぜひとも投票をお願いいたします。



木村 友昭 (きむら・ともあき) / 1957年、広島市生まれ。東京大学農学部卒、広島大学大学院医歯薬学総合研究科修了、博士(医学)、応用心理士。現在、一般財団法人 MOA 健康科学センター理事・主任研究員、広島大学医学部客員講師。

8

事務局だより

市川 優一郎 事務局長 (日本体育大学)

今期の事務局長を仰せつかっております日本体育大学の市川優一郎と申します。昨年度行われました役員選挙を経て、本学会は4月より新しい役員体制になりました。また同時に、事務局業務を(株)国際ビジネス研究センター様に委託することとなりました。それらに伴いまして、学会誌への投稿の停止をはじめとし、会員の皆様にはさまざまなご不便をおかけいたしましたこと、心よりお詫び申し上げます。お陰様で、新たな役員体制のもとでようやく業務の移行作業も落ち着き、少しずつですが軌道に乗ってきたように思います。

事務局長という大役を私に果たすことができるのか、未だ不安でございますが、本学会の歴史と伝統の重みを噛み締め、これまで本学会を支えてこられた諸先生の「思い」を、しっかりと引き継いでいかなくはなりません。そして今期の3年間、事務局として藤田理事長と古屋副理事長を支え、時代に即した新しい方向に前進する学会にしていきたいと思っております。そのためには、今期中に事務局業務の大幅な効率化ならびに予算の見直しを進め、その成果を少しでも会員の皆様へ還元していきたいと考えます。そして、会員の皆様が「応心に入っていて良かった」と思っただけのように、誠意努力していく所存でございます。不慣れなことも多く、ご迷惑をおかけすることも多々あることかと存じますが、会員の皆様の温かいご理解とご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。



市川 優一郎 (いちかわ・ゆういちろう) / 日本大学大学院文学研究科博士後期課程修了(博士(心理学))。日本大学文理学部心理学科助教を経て、現在日本体育大学体育学部体育学科准教授。専門は、生理心理学、教育心理学、健康心理学。

9

『応用心理学ハンドブック』について

ワーキンググループ 藤田 主一・古屋 健

日本応用心理学会(以下、本学会)は、過去から今日までの間に、本学会企画・編集の書籍を多数出版してきました。学会誌・機関誌を除く代表的な書籍を記載しましょう。

●日本応用心理学会編『心理学講座』(全12巻、別巻)中山書店、1953～1954年。

- 日本応用心理学会・日本職業指導協会共編『職業指導講座』（全6巻）中山書店、1955年。
- 日本応用心理学会産業心理部会編『産業心理ハンドブック』同文館、1958年。
- 日本応用心理学会編『ロールシャッハ・テストの実際適用例ーロールシャッハ・シンポジウムより』誠信書房、1960年。
- 日本応用心理学会産業心理部会編『日本産業心理関係文献目録』労働科学研究所、1963年。
- 日本応用心理学会編『応用心理学事典』丸善、2007年。
- 日本応用心理学会企画『現代社会と応用心理学』（全7巻）、福村出版、2013～2015年。

このたび、本学会では学会設立90周年を記念して、本学会企画『応用心理学ハンドブック』（福村出版）を刊行することになりました。全800頁の大著で、16章の構成、2020年発行の予定です。章構成は、「研究法」「認知」「感情・情動」「教育」「発達」「人格」「臨床」「福祉」「健康」「看護・医療」「犯罪」「社会・文化」「産業」「交通」「災害」「スポーツ」であり、それぞれの章が「〇〇と応用心理学」になります。各章20トピック（項目）では、標題の概説だけでなく、最新の応用心理学の研究を含めて執筆していただきますので、新たな本学会の1ページになるものと期待しています。

10

学会史編纂委員会より

藤田 圭一 日本応用心理学会 理事長

学会史編纂委員会は、2016年度より理事長直属の委員会として発足し今日に至っています。したがって、今後とも委員長は理事長が兼務することになります。

すでに日本応用心理学会（以下、本学会）ホームページで公表しているように、本学会は日本心理学会（1927年設立）と並んで長い歴史を有する学会です。東京在住の心理学者が中心となり1931年6月に「応用心理学会」が誕生していますが、これ以前の1927年には、関西において「関西応用心理学会」が立ち上がっており、1934年4月には京都帝国大学で関西と東京の合同大会が開催されています。さらに、1936年4月の大会より「応用心理学会」に「日本」を冠して、今日の「日本応用心理学会」の名称が確立しました。設立当初以来、本学会の会員は当時の日本の心理学界を代表する心理学者のお名前ばかりです。詳細については、1998（平成10）年9月に発行された『応用心理学研究 別冊：日本応用心理学会史ー学会活動の変遷、回顧と展望ー』をご覧ください。

そうしますと、本学会設立の年月をいずれに求めるのかは難しいところですが、今後の100周年に向けてさまざまに準備を開始する必要があります。そのため、委員会ではアーカイブという視点から、本学会の歴史を散逸しないように整備していくことになりました。基本的には、①本学会に関わる資料・史料の蒐集と編纂、②名誉会員へのインタビュー、③蒐集した成果の公表、④『日本応用心理学会100年史』の発行、などを目的にします。これまでに、数名の名誉会員から本学会にまつわる貴重なお話を承っています。お話しの内容等につきましては、いずれ同意を得た上で会員の皆様にもお伝えする予定です。

関連学会の大会情報

広報委員会

日本心理学会 (<https://psych.or.jp/>) : 2019年9月11日(水)～13日(金) 立命館大学 大阪いばらきキャンパス

日本教育心理学会 (<https://www.edupsych.jp/>) : 2019年9月14日(土)～16日(月・祝) 日本大学 文理学部

日本生理心理学会 (<http://www.seirishinri.com/>) : 2019年5月25日(土)、26日(日) 文教大学

日本健康心理学会 (<http://jahp.wdc-jp.com/>) : 2019年9月28日(土)～29日(日) 帝京科学大学

日本スポーツ心理学会 (<http://www.jssp.jp/>) : 2019年11月15日(金)～17日(日) 筑波大学

日本法科学技術学会 (<http://www.houkagaku.org/>) : 2019年11月7日(木)、8日(金) 中野サンプラザ(東京)

全国保育士養成セミナーのご案内

2019年度の全国保育士養成セミナーが2019年8月29日(木)、30日(金)の両日、神戸ポートピアホテルで開催されます。この大会は、1974年に第1回全国保母養成セミナーと称して開催されて以来、2019年度は第45回目を迎え、神戸女子短期大学・神戸女子大学において長瀬荘一実行委員長を中心に近畿ブロックが一丸となって取り組み開催されます。

2019年度の大会テーマは「保育の質と人間形成への創造 ー守るべきこと、変わるべきことー」です。時代に応じた保育士養成とは何か、これからの時代を羽ばたく創造性あふれる保育士の養成は、未来を担う子どものより良き発達につながるものです。そうした子どもと保育士の育ちを基盤とした保育の質と人間形成について、これからも脈々と守るべきことと、変えていくことを保育の価値観として模索するものです。

全国保育士養成協議会は、保育士を養成する学校を会員とする団体です。現在は、北海道から沖縄まで546校が会員となっています。そこでは、会員校の教員を中心として、第三者評価や研究調査、研修会、保育士試験など地域貢献とも言える活動を組織として実施しています。2019年度のセミナーもその一環で、毎年1000名前後の参加者があります。

皆さま、これからの時代を担う子どもを育む保育とその保育士養成の未来について一緒に考えてみませんか。神戸でお待ちしています。プログラムの詳細は全国保育士養成協議会のホームページで順次案内しています。

http://www.hoyokyo.or.jp/images/home_img_mainvisual_01.jpg

2018年度日本応用心理学会学会賞

[敬称略、所属は論文掲載当時、順不同]

論文賞

「セルフコンパッションが友人関係における援助要請に及ぼす影響の検討」

宮川 裕基 (帝塚山大学心理学研究科)

谷口 淳一 (帝塚山大学心理学部)

[掲載雑誌]

『応用心理学研究』 第43号 第2号, 113-122, 2017

奨励賞

「110番通報要領に関する事前知識が通報の正確性と迅速性に与える影響

—模擬場面における訓練効果—」

豊沢 純子 (大阪教育大学)

竹橋 洋毅 (関西福祉科学大学)

[掲載雑誌]

『応用心理学研究』 第43巻 第1号, 33-44, 2017

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込みください。
このページをコピーし必要事項を記入して、学会事務局宛までご郵送ください。

日本応用心理学会入会申込書（一般・院生・学生）注2、注3

		申込年月日	20	年	月	日
フリガナ	推薦者(会員)注6					
氏名	(印)					
ローマ字	性別	男・女				
	生年月日	年 月 日				
現住所	〒_____					
	電話番号	()				
最終学歴	〔 年 月〕【在学中のものではなく、卒業あるいは中退・修了について学科名まで】					
所属注4	名称					
	所在地	〒_____	電話番号	()		
	職名 現学歴	【職名の場合には年数、院生の場合には課程・専攻、学部の場合には学校名・学年】				
研究領域注5	テーマ					
	原理 学習 認知 感情 教育 発達 人格 臨床 福祉 相談 健康 看護 医療 犯罪 社会 文化 産業 交通 災害 スポーツ 生理 行動分析 調査 統計 その他 ()					
メールアドレス						
備考						

※申込用紙の個人情報、学会活動や運営上必要な事務連絡、本学会の事業目的達成のため以外に利用されることはありません。

記入上の注意

注1. 楷書で正確に記入してください。

注2. 申込書の上部に書かれている会員種別で、希望する会員の種類を○印で囲んでください。

注3. 一般会員、院生会員の入会資格は、会則第4条第2項に次のように定められています。

一般会員、院生会員の入会資格は、次の通りとする。

- (1) 四年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
- (2) 一般社団法人日本心理学諸学会連合が認定する心理学検定1級合格者で22歳以上の者
- (3) 第1号に準じ常任理事会が認める者

(1)の隣接分野とは以下の分野を指しています。

教育学、児童学、人間関係学、体育学、社会学、社会福祉学、芸術学、宗教学、医学(心身医学、精神医学、行動医学など)、看護学、経営学、認知科学(人口頭脳など)、人間工学、など。

(1)の入会資格に該当しないと判断される場合は、備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴(年数)をできるだけ詳しく書いてください。(2)の入会資格にて入会を申し込まれる場合は心理学検定1級合格証のコピーを添付してください。(3)の第1号に準じるものと認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。後日さらに詳細な資料を求める場合もありますのでご了承ください。

注4. 社会人学生の場合には、在学大学(大学院)名等詳細を備考欄に記入してください。

注5. 研究領域は、主な3領域を○印にて囲んでください(3つを超えて○印を付けてもかまいません)。

注6. 推薦者を必ず書き署名・捺印をもらってください。推薦者がいない場合には、理由書を添付してください。

事務局受付〔 〕 審査〔 〕 本人連絡〔 〕 会費納入〔 〕

日本応用心理学会認定 「応用心理士」資格認定申請のご案内

「応用心理士」事務局

本誌の「応用心理士の現場」では、応用心理士資格を活かして活躍する会員の皆様をご紹介します。多趣多様な分野で心理学の知見を発揮される会員が1人でも多くなりますよう、ぜひ資格の取得をお勧めします。

【認定制度の趣旨】

日本応用心理学会では、学会員で業績のあるものに対し、本人の希望により一定の手続きを経て、標記の「応用心理士」の資格認定証を交付することいたしました。

現在、いくつかの心理学関係の学会で資格を認定しています。厳重な試験に合格しなければ一定の資格を認定しないところもありますし、心理学に関する所定の単位を取得すれば一定の資格を認定するところもあり、まさにさまざまです。本学会では認定の基準を一步進めて、学会の会員(名誉会員・一般会員・院生会員)であること、きちんとした業績を持っていることを主要な要件にしました。資格要件の詳細についてはこの手引きのなかに明記されています。この資格は、個人や集団の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として考えられたものです。

【資格要件】

学会で認定する「応用心理士」は、学会員の専門職としての資質があると認められた証明になります。

資格の要件は、日本応用心理学会認定「応用心理士」認定制度による認定資格の基礎的条件として、本学会に入会後満2年を経過し、現在会員であることが必要です。

さらに、次の(1)から(4)のいずれか1つに該当し、応用心理学の専門職としての資質があると認められた人に認定されます。なお、(1)から(4)のいずれかの要件も完全に満たすことができない場合は、該当内容を総合し、判断されます。

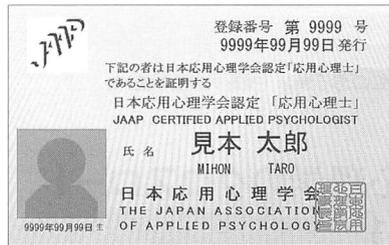
- (1) 学校教育法に定められた大学または大学院において、心理学専攻又はこれに準ずる分野を卒業あるいは修了した者(学位授与機構の審査により学士の学位を授与された者も含む)。
- (2) 本学会機関誌『応用心理学研究』に1件以上の研究論文(共著も含む)を発表した人、または本学会の年次大会において2件以上の研究発表(単独発表または責任発表のもの)をした者。
- (3) 認定審査委員会が応用心理学と関係があると認めた専門職で、3年以上の経験を有する者。
- (4) 応用心理学と関係ある職で3年以上の経験を有し、本学会研修委員会企画の「研修会」に5回以上参加した者(申請時に5回分の「受講証明書」を添付してください)。

【資格申請の手続き】

会員で日本応用心理学会認定「応用心理士」の資格を得ようとする人は、以下の順序に従って申請の手続きをしてください。

- [1] 「応用心理士」の資格申請書類をダウンロードしてください(学会ホームページに掲載)。

- [2] 申請書類に所要事項を記入し、下記の申請受付期間内に、送付してください。
- [3] 審査料(10,000円)は、郵便振替で送金してください。郵便振替の振込先
口座番号 00110-6-359059
加入者名 日本応用心理学会
※注意: 申請書類一式の中に同封されている郵便為替用紙をご利用ください。
- [4] 提出する申請書は次の通りです(提出の際確認してください)。
(1) 様式1(資格認定申請書)
※所定の枠内に証明証用カラー写真(ヨコ35mm、タテ45mm)を貼付してください。
※審査料の振込受領証をコピーし貼付してください。
(2) 様式2-1(履歴書)
(3) 様式2-2(業績書)
(4) 「研修会」参加を資格要件とする場合は、「受講証明書」5回分を添付してください。
- [5] 認定審査委員会では、提出された書類について審査し、結果を文書にて、申請者に通知します。合格した人は認定料(30,000円)を納入してください。入金されますと、日本応用心理学会認定「応用心理士」として認定証を交付します。また、日本応用心理学会認定「応用心理士」名簿に登録するとともに、本学会機関誌『応用心理学研究』に掲載して公表します。



応用心理士認定書(カード)の見本

【申請受付期間】

	【前期】	【後期】
申請受付期間	毎年4月1日～6月末日	10月1日～12月末日
審査結果通知	8月上旬	翌年2月上旬
認定料納入日	8月下旬まで	翌年2月下旬まで
認定証の送付	9月下旬	翌年3月下旬

【応用心理士事務局】

日本応用心理学会認定「応用心理士」事務局
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町518 司ビル3F
株式会社 国際ビジネス研究センター 内

来田 宣幸
張 貞京
川地 亜弥子
佐々木 美智子
田中 真介

表紙写真：虹のある風景（撮影：本原琴美）

応用心理学のクロスロード Vol.11

編集・発行 日本応用心理学会
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町518
司ビル3F
(株)国際ビジネス研究センター内
TEL.03-5273-0473
FAX.03-3203-5964
E-mail j-aap@ibi-japan.co.jp
HP <https://j-aap.jp/>

編集制作・協力 本原琴美
デザイン 株式会社 杏林舎
印刷・製本 株式会社 杏林舎

2019年3月31日 発行

■ 編集の作業とは奥の深いものだと知りました。ひとつの作品として仕上がるまでに、いろいろな人の力が加わり、また、コーディネートされ、そして……。私自身、論文や書籍、またこの広報誌クロスロードなど、多少、印刷出版に関わってきましたが、まだまだ知らないことが多かったですし、力不足を感じたことも多かったです。本誌に登場していただいた全ての方に感謝をしつつ、また、本誌の作成に携わっていただいたすべての方に感謝の意を表します。（来田宣幸）

■ はじめて広報委員に参加しました。夏の学会から広報誌が完成するまで、編集に関わる皆さまのエネルギー溢れる時間に圧倒され続け、メールの連絡に追いつけないことも度々ありました。その一方で、様々な分野の研究や情報を伝えるクロスロードならではの面白さを実感することも出来ました。学会に参加するだけでは得られない経験でした。いつもの爽やかな笑顔で広報委員に誘ってくださった田中真介先生に感謝いたします。何事も積極的に参加して経験すべしですね…。（張 貞京）

■ 今回、初めて広報委員となりました。「委員」とは名ばかりで、来田さんや本原さん、田中さんには大変お世話になりました。応用心理学会は、会員の研究フィールドが多岐に渡ります。この「クロスロード」が、普段接することのないフィールドをもつ人々との出会いの場となり、交流が生まれることを期待しています。

（川地亜弥子）

■ 編集作業への参加も4回目になりました。今号は、若手の来田さんを編集長として、大会当日に原稿依頼書をお渡しし、取材や写真撮影も、より連携した体制がとられました。広報委員会から学会誌編集委員会へのメンバー移動もあって、両誌の任務分担もスムーズに行われたように思います。私自身は、老母の看取りから間もない大会参加となり、橋渡しの役目以外は広報委員としてあまりお役に立てませんでした。一会員として心の趣くまに大会会場をめぐり、お話を伺いました。人生において次々に起こるエピソードにも、どなたかが、必ずそれにふさわしいテーマを掲げて研究をしておられる、そんな多様で奥の深い研究集団が本学会なのではないかと、いつもながらの学びに感謝申し上げます。

（佐々木美智子）

■ 『応用心理学のクロスロード』第11号をお届けします。新しい体制での最初の号です。本号では来田宣幸委員が編集長の役割を担い、新委員で協力しあって「大会アンケート」「会員だより」「おすすめの一冊」「海外最新事情」などの新企画に取り組みました。クロスロード誌は、2010年6月に「さまざまな人々の出会いと発見の広場」となる広報誌として創刊されました。これからも本誌が、気軽に対話できて相互理解を深めあう場として生かされていくことを期待しています。（田中真介）

JAAP

The Japan Association of Applied Psychology